HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 貸本屋独立社とその継承者たち |
| 著者 | 藤島，隆 |
| 引用 | 北海学園大学学園論集，133：37-75 |
| 発行日 | 2007-09-00 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

# 貸本屋独立社とその継承者たち

藤　島　　隆

## 目　次

はじめに
1．足助素一と独立社
(1) 足助素一について
(2) 独立社の開業
(3) 独立社という店名
(4) 独立社の蔵書
(5) 独立社を詠う
(6) 独立社を利用した人々
(7) 足助，上京後の独立社
(8) 独立社蔵書印のある図書
2．興膳辰五郎と独立社
(1) 遠友夜学校と独立社
(2) 興膳辰五郎について
(3) 興膳辰五郎と独立社
(4) 興膳辰五郎のその後
3．田所篤三郎と創建社
(1) 創建社事件
(2) 小説「酒狂」と「骨」のモデル
(3) 田所篤三郎について
(4) 創建社書店について
4．棚田義明と再現社
(1) 棚田義明について
(2) 札幌短歌会と雑誌「路傍人」
(3) 貸本屋再現社について
(4) 雑誌「無産人」の発刊
(5) 再現社の閉店
5．奥出三郎と白羊社
まとめ
参考文献一覧
〈資料〉独立社蔵書目録

## はじめに

貸本屋独立社との出会いは今から30年程も前のこと，学長をされていた高倉新一郎先生にその名をうかがったのが初めてであった。この貸本屋は有島武郎の親友で叢文閣という出版業を起こした足助素一(そいち)が，明治末期から大正初期までの数年間，札幌の市街に開業し，また社会主義者やアナーキストにより店の名をかえて引き継がれ，当時の学生や知識人に大きな影響を与えたこと，独立社については足助の遺稿集である『足助素一集』によって知ることができること，渡辺惣蔵の『北海道社会運動史』のなかで独立社を引き継いだ人々について紹介されていることなどをご教示いただいた。

渡辺によれば，独立社は足助がこれを放棄して上京したことにより，田所徳(ママ)三郎によって引き継がれ創建社といった。大正11年頃には棚田義明による再現社，大正末年には奥出三郎による白羊社と，それぞれ経営者も店の名称も変わったが，足助の店は昭和3年頃まで札幌の街に生き続けたとある。

その後，新たな史料をみることもなくうち過ぎていたが，北海道大学附属図書館の北方資料室に訪ねてこられた秋葉安一氏とお話をしているなかで，偶然にも貸本屋再現社，白羊社のことをよくご存知で，棚田，奥出両氏とも知己の仲であるということをうかがった。

ところが昭和54年の春，筆者は旭川に転勤となり，札幌を離れること5年，例年になく暑かった夏も終ったある日，秋葉氏のお宅にご挨拶にうかがうと，氏は近くの病院に入院されていた。久しぶりにお会いしたがお元気そうで，明日は退院するのですと話しておられた。それから1ヶ月，10月5日の早暁秋葉安一氏は幽明の境を異にされた。享年86歳であった。

何故，もっとよくお話をうかがっておかなかったのかと悔やまれたが，まもなく秋葉氏とのご縁で棚田義明氏にもお会いすることができ，再現社時代のことを直接うかがうことができた。その他，この貸本屋に関係した方達にもお会いしてお話をうかがうことができたのだが，以来長い年月が経ってしまった。

大学図書館での仕事も終えたいま，明治の末期北都札幌に足助素一が開いた貸本屋独立社と，これを受け継ぎそこに生活した人々の息づかいを記録にとどめておく必要があるとあらためて思った。それは，足助の店を引き継いだ人々について話して下さった方達にお報えすることになるはずである。

## 1．足助素一と独立社

### (1)　足助素一について

足助素一は明治11年1月1日，足助群右衛門とさだの長男として岡山県川上郡手荘村地頭に生まれた。生まれながら身体は虚弱であったが，歴史に興味を持つ鋭敏な少年として成長する。明治32年の春，同志社中学校を卒業し，7月札幌農学校予科に入学した。この年の秋から34年秋頃まで青年寄宿舎に止宿する。同宿には逢坂信悉や河内完治がいて，彼らと親しく交わることとなった。

逢坂の回想によれば，彼が札幌農学校に学んだ動機は志賀重昂の『日本風景論』を読み大いに感動したことによるという。寄宿舎の玄関のすぐ前には小さな池があって清水が湧き，小海老や蟹などが棲息し，南窓からははるか恵庭の峻峰を望むことができたと述懐している。足助も北海道の雄大な自然と農学校の自由な気風にあこがれて来札したのかもしれない。

明治33年有島武郎，森本厚吉，木村徳蔵を中心とする土曜会が生まれ，足助は河内ら友人と出席するようになり，しだいにキリスト教への関心を深めていった。翌年には遠友夜学校（新渡戸稲造創始による貧しい人々の子弟のための教育機関）の教師となり，熱心に奉仕をした。

明治37年7月林学実科を卒業，8月山梨県に奉職し林政事務にたずさわるが，2年ほどで佐賀県へ転任する。彼は生来，「正誤の問題をいい加減にゴマカシて置く事は大嫌い」な性格であったから，ここで俸給生活に嫌気をさすような事件に会い辞表を提出するが受入れられず，9月青森県に転ずる。だが10月，突然に「御用済に付雇を解く」いう辞令を受けた。その後，宮崎県の製材会社に職をもとめるが，半月たらずで再び北海道へと舞い戻り，小樽木材株式会社に勤めた。しかし，ここでも4ヶ月ほどで多病の名のもとに解雇されてしまう。それ以来，彼は全く俸給生活をやめ独立自営の道を考えるようになる。こうして生まれたのが貸本屋「独立社」であった。

足助素一肖像（『足助素一集』より）

彼は昭和5年癌のため53歳でこの世を去ったが，法名を「雷音院釈蔵華素光居士」といい，これは岩瀬法雲と生前謀ってつけたものだという。彼の住まいを雨田居（雷の意）と号したり，自らを「いが栗」とか「毒葎」，「毒一」といったことからも彼の人となりをうかがい知ることができる。

足助と交際のあった者で彼と喧嘩をしなかった者はいなかったといわれるほどであるが，近藤憲二は「足助さんと喧嘩したほどの人で，足助さんを心から憎んだ人があるだろうか。先づない。どんなに我武者らに怒鳴つてゐても，その腹の底が，その純情が，汲みとれるからだ。呶鳴り合ふ度び毎に，だんだん足助という人間の真底に触れて来る。そして，どうしても離れられなくなつてしまふ。妙な男があつたものだ」と語っている。

先に有島を送り，今また足助を失った悲しみのなかで，親友原久米太郎は，「本来純情的な彼，熱情的な彼，奇抜的な彼，存外冷静な彼，純一な気迫で人に迫る彼，気分本意で人を罵倒する彼，圧迫的に甘へる彼，迷信家の彼，旧統を脱しきらない彼，理知的な彼，常識的な彼」と足助のことを追懐している。『足助素一集』にみる足助の面差しは年齢よりずっと若々しくみえるが，その鋭いまなざしや風貌からは強烈な印象を受けるのである。

### (2)　独立社の開業

独立社のこわれし椅子に
　　こつそりと
　　人のこぬ夜は涙ながせり

これは啄木の影響を強く受け，自らも三行書の歌を詠んだ吉崎研亮の歌集『民衆の太陽』の中

の一首である。

明治41年小樽木材株式会社を去った足助は道庁への誘いをことわり，「独立自営」の道として，6月貸本屋「独立社」を北7条西4丁目肝付方に開いた。15～16冊ばかりの本を小さな古い柳行李に入れて始めたものであったが，4～5年のうちに何度も居を移し，その度に独立社は大きくなっていった。

明治42年　　独立社を北8条西6丁目に移す
　同　年9月　2ヶ月間、北2条東2丁目の下宿屋の2階に置く
　同　年11月　北1条西6丁目に移す
明治43年3月　南大通西5丁目に移す
明治44年12月　南1条西5丁目新川通に移す

足助の年譜によると独立社の移転の様子は以上のようだが，明治45年3月には南大通西4丁目（新川通）に落ち着いた。独立社を利用した加藤常子は当時のことを以下のように語っている。

札幌では，独立社と，富貴堂で常に新鮮な書物をよませて頂き，思想の林は豊富に茂つていました。独立社主人は，愛嬌のない気むづかしやで，気の合はぬお客には本を貸せない人でした，気の重い日には表戸を閉め切つて，真駒内あたりの草ッ原に行き終日青天上を，にらみながら，瞑想にふける人でした，御店の表には荒けずりの板に「本日散歩につき休業」とかいたのが寂しく風に吹かれてゐました，私は其処を通行してあゝ今日も又独立社の主人は，御機げんなゝめであると自分も淋しく感じたものでした。

気難しい主人だが，独立社のお得意は農科大学の先生（足助が橋本左五郎に宛てた手紙には「往年独立社第一の顧客たりしあなたに」とある）や学生達で，店はこの人達が寄り集まり一種のクラブのような観を呈したという。独立社は店売りが中心であったが，やはり開業当初は風呂敷に本を包み，知人を頼って歩いたし，店が落ち着いてからは人を雇って外廻りをさせたようである。それは足助が「貸本は店丈けでは不十分外廻りで一切の費用を償はせ店の収入が純収入になる様なれば十分なるべし」と語っていることからもわかる。

店先には油絵具を用いて有島によって描かれた看板が掛けられていた。本箱はガラス戸入りのもので「貸本屋では僕の処ばかり」と自慢している。本の種類によって棚ごとに分類して置かれていた。明治45年7月，古物商の鑑札をとって古本屋も兼業した。これが意外に好調で，「古本売上げ総高は百四十円買入れ六十六円，先月は予想外の好成績で……純益として残れる金員七十七円，独立社開闢以来の好成績です」と父親に手紙で知らせている。足助が友人に宛てた書簡の中に独立社の営業状態にふれたものがあるので，次にみてみることにする。

○明治41年6月23日　完兄

本代ハ月末に送る，毎月五円ヅゝと思つたが中々さうは出ない，無止三円丈け送る，来月も三円，まづ三ヶ月で払ふ処を六ヶ月で払ふといふ訳になるのだ，それで承知して呉れ給へ。

翻訳小説と可愛らしい（少年少女の読物としての）物語―小説―とを大に集めたいと思つている，何か面白いものがあつたら知らし給へ。

○明治42年1月21日　石楠兄

兄に実際的のことを頼むほど迂愚なることは天下にあるまいと思はれるが差向き在京の友人もないので敢て兄を煩はす。外でもない，東京に於ける貸本事業を調べて貰ひたいのである，左の項目によりて。

一，貸本ハ何日間を以て一期限とするか，

二，見料は何の本も同一なりや，同一なりとせバ其見料，

三，本によりて見料を異にするとせバ何を標準として定むるや（札幌にてハ定価を標準とす）及各標準毎の見料幾許，

四，貸本として最も多く貸出さるゝものハ如何なる種類の書籍か，

五，学生が通学の余暇原価百円位の書籍を資として貸本し能く学資を償ひ得べきや，

此の五項について実際について調べて呉れ給へ。

○明治42年9月3日　績兄

独立社ハ追々発展しつゝあり，事業ハ三十年計画（命があれバ）なり，千円の金を得ば東京に出でゝ出版業を営むべし尚此他には独立図書館を建てるつもりなり。

○明治42年12月14日　完治兄

此度こそは店らしい店になつたぞ場所ハ道庁の南門通り東と北とに向へる二間に二間の角店だ，硝子戸入りの本箱ハ貸本屋では僕の処ばかり，但し年末ではあり試験中ではあり未だ人もよく知らず大に不景気店頭収入ハ一日十五銭内外，其他で一日平均一円位。

○明治43年4月23日　完兄

金は仲々送れないよ，此頃の利益ハ六七十円あるも本の購入其他の支出が矢張六七十円あるため利得から御返金するといふことは仲々困難何とか一ト工夫しなけれバならぬと思つている。

独立社の貸本料は1日2～3銭，1週間で5～6銭であったようだ。収入は1日少なくても1円，多ければ4～5円あり，月にすれば70～80円の売上げがあったことがわかる。貸本屋独立社

は足助が忌まわしい会社勤めのあと，独立自営の道としてまず始めたものであるが，彼の理想はあくまでも「30年計画で大出版屋と大図書館を経営」することであった。そして，彼は北国の街角に開いた小さな貸本屋は日本一の貸本屋であるという自負をもっていた。

札幌の独立社
　かって忘れず
　髯の主人とこわれし椅子と

### (3) 独立社という店名

大正5年刊の『札幌便覧商工案内』をみると，古本売買貸本店の部には以下のようにある。

片桐いろは堂　南1条西5丁目新川端西側
文　明　堂　南2条西4丁目
独　立　社　大通西4丁目
大　光　堂　南2条西4丁目
尚　古　堂　北大通西4丁目

独立社の付近，南北1，2町のあいだに古書店が4軒もあり，ここに店が集まっていたことがわかる。尚古堂は代田茂樹の先代亀次郎の始めたものである。独立社の東側，もとの停車場通りには富貴堂（南1西3）や維新堂（南1西4）といった新刊本屋もあった。

さて，「独立社」という名前だが，足助の書簡などからは，自ら始めた貸本屋をどうして「独立社」と名付けたのか，具体的なことは残念ながら知ることはできない。瀬沼茂樹によると「独立教会」にならって付けたのだとあるし，吹田順助は自伝の中で足助の号「毒葎」からきているといっている。たしかに足助は有島や末光績といった友人によってキリスト教に導かれ，明治37年3月12日の日記には神の愛を翻然と悟り，「余ノ信仰ハ今宵ヨリ新タナラネバナラヌ」と書いている。

しかし，この貸本屋は数年間の俸給生活を送ったのちに，「僕ハ愈々雇人ハ嫌になりし故靴磨きにでも何でもなりて独立自営するつもり」といって始めたのであるから，そのために「独立社」としたと考えた方が自然なのではないだろうか。もちろん内村によって建てられた独立教会のことも知っていたし，「僕若し教会に入るの要を認むれば直ちに行て札幌独立教会に入らんのみ」といっているから，それをも慕ってのこととは思われるが，「毒葎」という号は彼が毒舌家であったことと店の名独立社の発音に似た点で自称したものと思うし，友人河内完治もそういっている。

彼の神経は鋭敏で傷つきやすく，たとえ日用の糧を得るためとはいえ，自分が尊敬することができぬ人間に使われるなどということは，耐え難く屈辱的なことでさえあった。もっと自由に独

立した一個の人間として生きることを欲したのである。とうてい「卒業證書のはじにとまって囀っている鳥」にはなれなかった。

### ⑷　独立社の蔵書

貸本屋独立社ではどのような蔵書を持っていたのであろうか。先にみた手紙からは翻訳小説や少年少女の物語，歌集や詩集，画集なども置いていたことがわかる。『足助素一集』足助たつ，昭和6年刊には明治43年1月に作成された独立社の蔵書目録が載っている。これはたいへん貴重な資料であるから巻末に再録しておく。

明治42年11月，独立社は北1条西6丁目，間口2間奥行き2間の角店に移った。やっと店らしい店になったと足助が喜んでいることから，これを記念して蔵書目録は作られたのかもしれない。目録によれば約500点ほどが確認されている。法律，経済，思想，文学書がそのほとんどで，新小説類も多く持っていたことが知られる。主要書目とあるように蔵書目録に載ったものは独立社蔵書の一部で，店の大きさからみても少なくとも1,000～1,500冊程の蔵書を持っていたであろうと考えられる。

明治末期はちょうど自然主義文学全盛の時期であったが，独立社の蔵書目録にも田山花袋や徳田秋声，永井荷風，正宗白鳥，国木田独歩らの作品が多くみられる。尾崎紅葉をはじめとする硯友社の人々や，幸田露伴，北村透谷，社会主義小説の木下尚江や徳富蘆花，それに反自然主義の立場をつらぬいた漱石，鴎外もみえる。戯曲では逍遥をはじめ明治20年代イプセンを紹介した高安月郊，女流作家長谷川時雨の名前もある。俳句では高浜虚子，評論では大西祝，内田魯庵，山路愛山などの民友社系の人々，それに「文学界」に集まった人達も多い。独立社はいわゆる高級貸本店として特徴ある営業をしていたが，それはこの蔵書目録をみても首肯できることである。

明治43年12月24日の小樽新聞には「札幌の読書界，読書力が何の方面にある？」という見出しで，「大通西五丁目の変人貸本屋独立社の主人」に聞いたとして，札幌の読書界の傾向について報告されていて興味深い。長い記事であるので，その一部分を掲げると以下のようである。

> 読書趣味の三期　一般の読書力が小樽より進んで居るだけは事実で小説類も割合に新らしい作物が歓迎される，それで先づ読書趣味を区分して見ると大体左の三期に区分される
>
> 一期は御伽話，冒険小説，草双紙類（八犬伝，太閤記等）二期は興味小説，即ち掬汀，幽芳，柳浪，水蔭，弦斎等の作物，三期は逍遙，鴎外，漱石等の作物，新進作家の小説，翻訳物，脚本物
>
> 右の標準で読書を区別して見ると婦女子，青年，官吏，小中学生の如きはセイゼイ二期位までしか読まない，三期の読者に至つては例外もあるが殆んど大学生あたりに限られて居るらしい，然しながら三期内の漱石物は敢て大学生に限らず広く愛読されて居る，脚本類は目下の処学生中でも余程ハイカつた（ママ）人々に持囃されて居る

### (5) 独立社を詠う

すでに吉崎研亮の歌集『民衆の太陽』の中の歌で，独立社を詠ったものを二つ掲げておいた。これは中山周三が『札幌の短歌』(さっぽろ文庫9)で紹介しているものと,「短歌研究」(昭和13.1)に小泉苳三が「埋れた歌集に就て」として解説しているものから，それぞれひろったものである。(小泉苳三は大正11年にポトナム短歌会を創設し,昭和7年から昭和22年まで立命館大学で教授を勤めた。また，彼の旧蔵歌書のコレクションは同大学に白楊荘文庫として収蔵されている。)

歌集『民衆の太陽』は菊半裁仮装のもので，大正7年に鎌倉で出版，著者は北海道で成長し胸を病んで鎌倉に移り住み，啄木の崇拝者であるという。はたして，吉崎の歌集の中には他に独立社を詠ったものはないのであろうか。機会があれば是非実見したいと思っていた。そこで神奈川県立図書館に所蔵の照会をしたところ，同館では所蔵しないが日本近代文学館で所蔵するということを教えていただいた。

暗褐色の表紙の粗末な歌集で，三行書きの歌が一頁に一首配されている。巻頭には「万民よ双手をあげていざ叫ばん太陽は民衆の所有なり」という歌が掲げられ，独立社を詠ったものは，「札幌の人々へ」というコメントの付された，「札幌」を詠った23首の初めの方に収められていた。すでに知るものの他に3首を確認することができた。

独立社の五人の同人の顔
O.I.S.F.の
　それから俺のふやけた顔。

これやこのわが貧しき独立社に，
　物乞へる男
　黄瓜のごとき男

数年前
　有島さんがかきしと云ふ
　わが独立社の剝げし画看板

歌集「民衆の太陽」

O.I.S.F.とはいったい誰であろうか。吉崎研亮はこの歌集の中で，自分は石狩川の「ずっと支流やまべと云ふ綺麗な小魚のとれるほとりで生れた。そして札幌で育った」といい，札幌の街は「私の魂の父と母である」と述懐している。彼は大正6年の春札幌を去り，翌年7月，20歳の記念に鎌倉材木座からこの歌集を出版した。だがこのとき彼は肋膜炎を再発して病を養っていた。来年の春になれば,その頃には病気もよくなっていると思うので,「草木」という雑誌を出したいといっているが，言葉のとおり6月，雑誌「民衆派の短歌」を創刊した。筆者は創刊号しか確認してい

ないが，A 5 判 16 頁程のもので発行所は鎌倉材木座芝原，草木社となっている。この雑誌はどれくらい続けられたのであろうか。

### ⑹　独立社を利用した人々

当時，独立社を利用した人々の声を直に聞くことができないものだろうかと思うのだが，すでにその頃の人達はほとんどが鬼籍に入っていて困難なことのようだ。しかし，これまでに独立社について書かれたいくつかの文献をみることができたので，次に掲げておこう。

そのうちの一つに函館高等水産学校教授大島幸吉の文章がある。彼は子供のときから，きわめて温順，不活発な性格で，読書好きであったといい，青年期には文学や哲学，宗教書をしきりに濫読した。

学生時代は独立社の常連であったという。また，後で出てくる「創建社」を経営した田所篤三郎は，一中時代に大島と同級であった。大島は「図書館，読書と私」（「オコック会誌」11 号　昭和 11）という随筆の中で，足助と独立社について次のように回想している。

> 幸ひ物質的に恵まれて居りました故，毎月数十円の新刊書籍を購入して読むことが出来ましたが，それでは到底不足で，一番厄介になったのは其の頃札幌の名物古本屋独立社でした。其の主人公足助素一氏は後に叢文閣と称する出版屋になりましたが林学実科の卒業生で学生時代に購入した書籍を土台に古本屋を始め，学生向の古本を沢山集めて居りましたので吾々は大学図書館へ行かず（其は小学校の図書館のみであった）独立社から参考書を借りて読みました。間もなく足助は私を熱心なる読書家と見込んで先方から私の読みたそうな新刊書を指定して貸して呉れました。氏と次第に懇意になり遂に氏としては珍しい恋愛問題の相談相手にさへなりました。トルストイ，ゴオルキィなどロシアの文学物，ルッソウの自叙伝，エミール，イプセンの人形の家や其他多くのドラマ，ショウペンハウエル，オイケン，ベルグソンの哲学書等多くは独立社の貸本で読みました。

貸本関係の資料の収集家でもあり研究家であった沓掛伊佐吉は「日本古書通信」に，明治から昭和の貸本屋まで 6 回に亘って連載している。その中で独立社についてもふれ，また資料をもとめて実際に札幌を訪れたとのことである。独立社についての記事は多く『足助素一集』によっているが，一つ興味ある資料として，坂西志保が昭和 36 年度の読書週間に野田市興風会図書館で講演した内容の一部が引用されている。女史は幼児期しばらく北海道で過ごし，小樽では家の近くにあった貸本屋にも通ったという。

> その後，夏休みを札幌ですごし，有島武郎の親友で，後に東京に出て出版事業に乗り出した足助という人の本屋に通い，武郎，武者小路実篤，志賀直哉など白樺派の作家たちの作品

に親しむ機会を与えられた。国木田独歩の小説を読んだのもこの夏であった。足助さんのお店には新刊書がたくさんあった。貸本のタナは別にあって，大衆的なものが多かったが，一日で読み終る私のために，新刊書も喜んで貸してくれた。本を読むのは全く孤独の楽しみであるがその楽しみを分け合ってくれる人があるとき倍になる。経験のないものの読み方は浅く，正しい評価など期待できない。そのような相手を軽視するのではなく，足助さんは忍耐深く耳を傾け，娯楽として本を読むだけでなく生活を理解し，視野を広げるために私を古典へと誘ってくれたのである。

もう一人，学生時代独立社に足繁く通った人物がいる。室蘭市成徳小学校や札幌市豊水，山鼻小学校の訓導を経て後年北海道教育評論社に入った石附忠平は，北海道師範学校を大正3年に卒業している。『北海道札幌師範学校五十年史』昭和11年刊に石附忠平は「思い出さるゝ四五」のこととして独立社についても書いている。

私は貸本屋独立社の常連となった。独立社と云へば新川通りにあって，奇人で有島武郎の友人として後年東京の叢文閣主として名高い足助素一の経営する所のものであった。其処には思想的な本が一杯ならべられてあった。

その頃この独立社の常連であった人が沢山あった。皆思想の展開期にあった。そして思想を求めて彷徨してゐた。然しそれを満して呉れるものとてなかった。それは自力で探し求めて獲入れなければならなかった。私共の小さな人生問題，思想問題の探求者としてせっせと独立社の書棚をあさった。

石附は師範学校時代に同室の七戸平吉達と句作に没頭し，数人で吟社を作ったりした。彼が独立社を知ったのはこの七戸の影響であったという。青少年時代を追懐した『切株の跡』北海道教育評論社，昭和29年刊をみると以下のようにある。

また同君は足助素一氏の貸本屋独立社から白柳秀湖の「町人の天下」を借りて来て私に見せました。この本を見た時の私の驚きは―それは革命的なものでありました。徳川封建制度下の厳しい桎梏下に町人社会がどう伸びて行ったか，その必然性を経済史観と詩的抒情味と，それが不思議に融け合った筆致でさながらに描写していました。私は完全に魅了されてしまいました。それから私は独立社の白柳のものを次々と借りて来て読みました。そしてこれを機縁に完全に独立社の病的常連となりました。

最後に有島の関係者達の回想から独立社の記事を二つ紹介する。まず吹田順助（芦風）の自伝『旅人の夜の歌』講談社，昭和34年刊から。吹田は明治40年9月東北帝国大学農科大学のドイツ

語講師として札幌に赴任した。そこで有島武郎との邂逅と友情を結ぶことになる。明治40年，予科に入学した原田三夫は吹田順助について，「小柄で丸顔の物静かな」先生で，「めったに笑ったことがなく，いつも椅子にかけ脚を組み体を楽にして講義をした」といっている。有島の社会主義研究会にも吹田はよく出席している。その中には原久米太郎，足助，蛎崎知次郎，逢坂信忢，末光信三，大石泰蔵らがいた。

将来は出版をやり出そうと考え，有島と前後して札幌に来てから，先ず手初めとして貸本業をやり出し，店は初めは転々としたが，終いには新川通りに店を構えた。店の名前は独立社。これは彼の号毒葎（彼の得意の毒舌をもじったものであろう）から来た名称であろう。丁度，私が植物園の南側に二人の学生と一軒の家を借りていたころ，貸本の布呂敷包みを担いだ足助は，有島の名刺を持って，初めて私を訪れた。私は書斎にひろげられた何冊かの本のうちから，飯田旗軒訳の『巴里』（ゾラの原作）二巻をえらび出すと，彼は鋭く光る例の眼で私の顔をじっと見て，「一度に二巻は多すぎるでしょう。一巻宛借りたら，どうです」というので，私は面白いことをいう人だな，と思いながら上巻だけを借りた。その後，私はたまに彼の店に立ち寄るようになったが，そんなときに女子学生などがやって来て，六ヵしそうな本を借りて行こうとすると，足助は「その本は君にゃ六ヵし過ぎるから，もっとやさしいものを借りて行き給え」などと，その少女に向って忠告（？）しているのを，傍で聴いていて，微笑を禁じえなかったものである。

同様のことを吹田は足助の遺稿集のなかでも語っている。原田三夫はまもなく肺炎カタルと診断され一時期故郷へ帰ったが，明治42年6月，大学に復帰し恵迪寮に入った。その頃足助は小樽木材株式会社を去り，貸本屋を始めている。原田と足助は有島の社会主義研究会や黒百合会で顔見知りであったようだ。原田三夫の『思い出の七十年』誠文堂新光社，昭和41年刊には次のようにある。

私が復校してから，雀の巣のような頭の西洋乞食みたいな足助が，本の包みを重そうにブラ下げてトボトボやってくるのを，寮の窓からよく見受けた。かれは自分が読んで気に入った本しか扱わなかった。だから大部な本は資金を寝かさぬため速急に読まなければならぬ。ちょうどそのころ徳富芦花の「思い出の記」が出たが，その長篇をかれは徹夜で一晩だかで読んだという。貸賃はどの本でも一冊一週間五銭均一であった。顔色が悪く蛇のような目のかれは，極めて無愛想で，入ってくると黙って包をひろげ，貸賃を問うものがあると，ただ「五銭!!」というだけであった。貸本で資金ができると，かれは新川通りで古本屋をはじめ，油絵の看板を有島先生がかいた。友人に恵まれることを潔しとしないかれは，はじめは縄の帯をしめ一日一度かゆをすすったが，のちには小僧を雇えるようになった。

この頃は「金がなくて1日1食で，3，4日辛抱した」というときなのであろう。これらの回想文をみても，明治末期，札幌に図書館施設といえば農科大学図書館と教育会図書館，それに北九条小学校図書館の3館だけで，青年達の旺盛な読書欲を満たす場所とて限られていた。そんな中で，足助の独立社はやはり特異な存在であったことが知られる。独立社の棚が古本と貸本に分かれていたことや，翻訳物の文学書や哲学書が多かったこと，それに貸本料がどの本も1冊1週間5銭であったことなどがわかる。いずれも主人は無愛想とか奇人と表現しているが，思想の形成期にあった青年達に与えた影響は計り知れないものがあったということができる。

### (7) 足助，上京後の独立社

大正2年11月3日の有島の日記（観想録15巻）をみると，「この八ヶ月の間に進行して，つい最近になって最高潮に達したロマンス」と書かれているように，足助はその年の春頃からよく店に来ては，残って彼と親しく話をするようになった女性（22歳のK女）にいつしか特別の感情をいだくようになっていた。ところが彼女は「裕福で甘い父親の一人娘だった」から，当然のこと彼の恋愛は成就しなかった。

またその頃，年老いた父から再三にわたって，金を出してやるから郷里に帰って何か商売をやらないかといってきている。足助が札幌を去った理由はいったい何であったのか。

大正3年の正月，彼は独立社の一切を自分が教師をしていた遠友夜学校に譲り，身一つで飄然と上京した。有島から足助に宛てたその頃の手紙には，彼が上京した直後の独立社の様子を散見することができる。

○大正3年1月10日

ドーも兄が去つてから気がゆるんだ様な気がする。店に行つて見ると鈴木先生と岡久が店頭の整理をしてゐるが，兄が見えないので店の魂がぬけがらになつた様だ。

○大正3年1月20～22日

松尾も昨朝帰札した。本屋の方も其中鈴木との授受をするだろう。鈴木，岡久は勉強してやつてゐてくれる。その外夜学校校外生の誰れ彼れ，夜学校教師の三人も，時々店に来てゐたやうだ。

○大正3年2月2日

社は例の橋本が来ることになり松尾は二日置き位に泊りに行く手筈になつてゐたが，昨日留守中に松尾が来て橋本はやめたいと云つて居ると云ふことを云ひ置いて行つたさうだ。……この間安積と松尾とで夜学校の会計の決算をした時独立社の会計は全く独立会計にして報告し，其金は兄の云ひ置かれた様に処置することに決めて置いた。

○大正3年2月23日

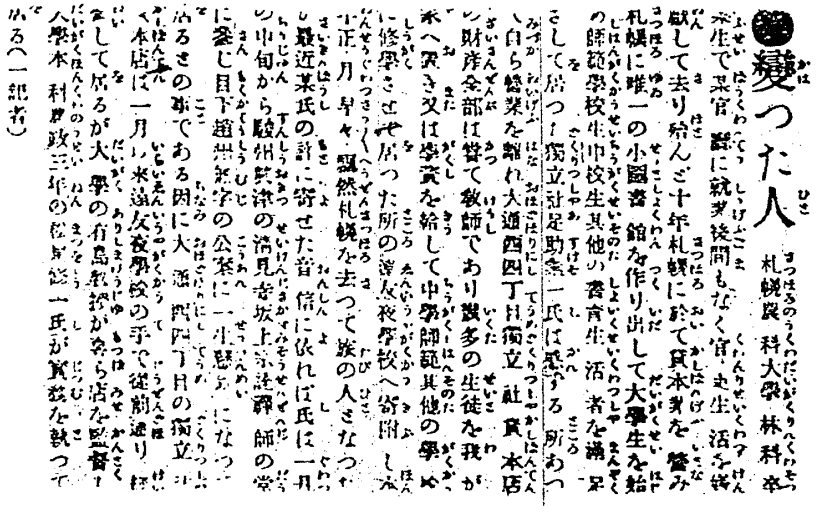
独立社も相当にお客があるらしい，松尾から時々通知があると思ふが，今は整理中とかで松尾先生勉強して何かカードか何か作つてくれて居る。この間タイムスに札幌の変わり者といふ題で兄が南下の始末が載つてゐた。

○大正3年3月29日

今日はおだやかな日曜だ。試験の点数記入も済んでやゝ閑を得た。今は独立社の看板書きをやつて居る。あの上等の方の看板をけづり直してそれに油絵で裏表に描いて居る。一片の木でも描き初めると愛着が出てその木を珠のやうに綺麗なものにしよう木から珠を造り上げようといふ芸術的創造の気分が潮のやうに湧き上る。兄が五年奮闘の記念碑を造るのだ。

鈴木，岡久（保一），橋本（一郎）という人の名がみえるが，これらはすべて夜学校の関係者のようである。「兄が南下の始末」というのは，大正3年2月21日付で北海タイムスに載った「変つた人」という記事のことである。それには「札幌に唯一の小図書館を作り出して大学生を始め師範学校生中学校生其他の書育生活者を満足さして居つた」と，足助の独立社を評価している。

足助が去った後，松尾修一が実質責任を持って独立社を運営していたことがわかる。貸本屋のかき入れ時は秋から冬の時期であるが，売上は意外に伸びず，しだいに経営は困難になっていった。やがて松尾が学校を卒業して夜学校の教師をやめ結婚，戸津高知の紹介で就職したため，以前のように独立社とかかわっていられなくなってしまった。先の手紙からも知られるように，独立社の収入は夜学校の会計とは別に分け，貸本の収入で夜学校の生徒に奨学金を貸与することを足助は考えていたが，その目論見はみごとにはずれ，逆に夜学校で持ち出しをするまでになっていくのである。



## 變つた人

札幌農科大學林科卒業生で某官廳に就職後間もなく官吏生活を嫌して去り続んで十年札幌に於て貸本業を營み札幌に唯一の小圖書館を作り出して大學生を始め師範學校生中學校生其他の書育生活者を満足さして居つた獨立社足助素一氏は感する所あつて自ら營業を離れ大通西四丁目獨立社貸本店へ財産全部は譲て教師であり數多の生徒を我が家へ置き又は學資を給して中學師範其他の學校に修學させ居つた所の淳友夜學校へ寄附し本年正月早々飄然札幌を去つて旅の人となつた最近某氏の許に寄せた音信に依れば氏は一月中旬から駿州沼津の清見寺坂上宗泰禪師の堂に參じ目下趙州無字の公案に一生懸命になつて居るさの事である因に大通西四丁目の獨立社本店は一月以來淳友夜學校の手で從前通りして居るが大學の有島教授が姿ら店を監督して人學本科卒政三年の松尾修一氏が實務を執つて居る（一記者）

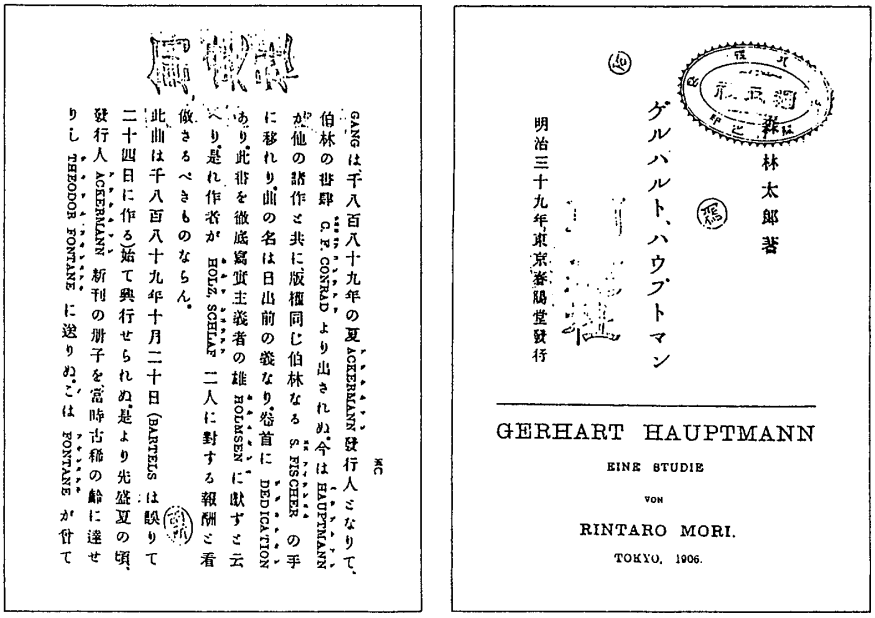
北海タイムス　大正3年2月21日

### ⑻　独立社蔵書印のある図書

「日本古書通信」677号（昭和60年12月）に，筆者の「貸本屋『独立社』を詠う」という拙文が掲載された。これを目にとめられた札幌市在住の小竹英夫氏から，実は「独立社」の蔵書であった図書を所持していらっしゃる，というお手紙をいただいた。すぐにもお訪ねして拝見したかったが，師走もおしつまった頃のことであり，年が明けてしばらくしてからお宅に伺いみせていただいた。

その本は森林太郎著『ゲルハルト，ハウプトマン』というＢ６判のもので，明治39年10月，東京春陽堂から刊行されたものである。これは鴎外が明治39年４月８日佐々木信綱の竹柏園大会で講演したものを一本にまとめたもので，明治43年１月現在で調製された「独立社蔵書目録」にも収録されている。扉には「札幌独立社蔵書之印」と３段に分けられた楕円の印が紫色のインクで押されている。同時に調，合の印も同色のインクで押されていて，これは棚卸しのときにでも帳簿と照合したときに押されたものだと思われる。もう一つやや薄く桃色のインクで「創建社」という隷書体の縦長の印も押されている。これは筆者が所蔵する図書の創建社蔵書印と少しく字体が異なり，創建社の蔵書印が数個あったということになる。それよりももっと重要なことは，独立社と創建社の二つの蔵書印を持つこの図書の出現によって，田所篤三郎の創建社は足助が始めた独立社を引き継いだものであるということが確認できたのである。

小竹氏は「この本を買ったのは，昭和３，４年頃のことだったと思います。場所も記憶がおぼろげですが，南２条か３条の西２丁目の古本屋です。たしか西向きの間口の狭い店でした。それが独立社の後身の店であったかどうかは分かりません。貸本屋ではなく，古書を売っていたようです。しかし，独立社の印が押してあったので，足助素一に関係した本であることは購入したと



SANGは千八百八十九年の夏ACKERMANN發行人となりて、
伯林の書肆G. P. CONRADより出されぬ。今はHAUPTMANN
が他の諸作と共に版權同じ伯林なるS. FISCHERの手
に移れり。此の名は日出前の義なり。卷首にDEDICATION
あり。此書を徹底寫實主義者の雄HOLMSENに獻すと云
へり。是れ作者がHOLZ, SCHLAF二人に對する報酬と看
做さるべきものならん。
此書は千八百八十九年十月二十日(BARTELSは誤りて
二十四日に作る)始て興行せられぬ。是より先盛夏の頃、
發行人ACKERMANN新刊の册子を當時古稀の齢に達せ
りしTHEODOR FONTANEに送りぬ。こはFONTANEが曾て



「ゲルハルト，ハウプトマン」の標題紙と蔵書印

きから知っていました」,「いま考えるのに,その店は貸本屋をたたむのに所蔵の本を売りつつあったのではないでしょうか。間もなくその店を見かけなくなりましたから」と話された。（この図書は最近になって，小竹氏からいただいて，現在は筆者の手元にある。）

70数年もまえ，札幌の繁華街を南北に流れる新川に面した足助の店のガラス戸の中にあった本と，巡り会うことができたいま，その奇しき因縁を感ずるとともに，この本に関わった人々のことを静かに思いやったのであった。

## 2．興膳辰五郎と独立社

### (1) 遠友夜学校と独立社

大正4年になると関係者の間で独立社の存続について真剣に議論されるようになった。足助と有島の手紙をみると，足助が札幌を去って1年もたたぬうちに独立社売却の話が出てきていることがわかる。

大正3年の初冬には，有島も胸を病んだ妻安子の転地療養のため札幌を去った。有島が去った後，遠友夜学校は蛎崎知二郎，半沢洵らによって運営されていたから，後掲の足助の手紙にあるH・K両元老というのはおそらく二人のことであろう。有島は農科大学を休職扱いになっていたし，札幌に残してきたことなども処理するために，大正4年の春再び札幌を訪れた。そのとき夜学校の関係者や松尾修一らと独立社のことについて話し合っている。

結局，独立社の売却はみあわせ，吉田清憲の長男が保証金と月額5円を払って，1年間そのまま貸本を続けることになった。しかし，足助は持ち前の気性から，独立社が「厄介，面倒等色々非難の声を聞く基となつて何んとも不愉快」であり，400円でも500円でもよいからさっさと処分してくれといってよこしている。だが，なかなか買い手はみつからなかった。足助と有島の書簡からこのような事情を知ることができる部分を抜書きしておこう。

○大正4年2月12日　足助から松尾宛

独立社売却のことについては従来度々有島君まで意見ハ述べてある。即ち維持必ずしも困難ならずとするも面倒だつたら何時でも売つて金に代えて呉れと，故ニお申越に対してハ更に異議なし。殊に貸本営業の見込で引継ぐのであつて見れバ誠に札幌の為にも幸といふものである。速に御決行ありたし。但し価格ハ千円といひたい処だが，せめて八百円位に行かないか，精々交渉あるべし。……併し衷心を叩けバ愛惜の念なからず。知らぬ人に売つてしまふといふのは惜しい，悲しい，一種哀別離苦といつた心地がするよ。

貸店ハよしたがいゝ。収入ばかり重んじて仕入を怠るに相違ないから段々さびれ行き虻蜂取らずハきまつて居るからね。月賦償却ハ短期にしなけれバだめだよ。手違其中に生ぜん。又保証人を要するよ。

○大正4年3月23日　有島から足助宛

独立社の問題に就ては蛎崎，松尾と或る夜半まで熟議した。蛎崎は経営困難を慮つて大分躊躇したが結局吉田清憲の長男が一年間保証金を入れ月額金（五円）を収めて一年間営業して見ることになつた。一年以上継続の場合には不動産を担保に入れることになつた。

○大正4年7月28日　足助から松尾宛

いや実際厄介なものを背負込ましてお気の毒だつた，併し損失等の結果にならうとハ僕ハ夢にも思ハなかつたのだから，半季五十円の純益は三年目にして既にあつたのだから（それ丈けの金ハ事実残つて行きつゝあつたのだから）経営者が違つてもそれ丈又ハそれより余り少からざる丈の純利ハ夜学校の金庫に加ハること，同時に札幌の読書子も便宜を得ることゝ思つたのが独立社寄附の理由で（職業放棄の理由は別にあり）それが今日人々に色々の累を及ぼし且つ厄介，面倒等色々非難の声を聞く基となつて何とも不愉快なり，厄介ものハ早く処分するに若かず，四百でも五百でも金と形を代えたらまさか議論好きのH・K両元老と雖も其の意見に齟齬を来たす憂もなかるべし，さうして僕もほつと安心したいのである。

○大正4年8月14日　有島から足助宛

独立社の件は此頃松尾から委しい来信があつて，あれを引受けた吉田が是非今年一ぱいやり度いといつている相だから，今年いつぱい丈けさせた上で処分するのが，吉田に対しても正当な処置だと思つてゐる。

○大正4年8月30日　有島から松尾宛

独立社の事は小生も一年間吉田氏にやらせ候方可然と存候。此間足助兄とも面会致候間其旨申通置候。兄もさしたる異存無之様存申候。

このように大正4年一年間は吉田清憲の長男が独立社を経営したということがわかる。吉田清憲は薩摩出身で開拓使の役人であったようであるが詳しいことはわからない。

有島の書簡にも，大正4年8月30日松尾修一宛を最後に独立社の記事をみることができなくなってしまう。大正5年以降，独立社はどうなったのであろう。誰かに売却してしまったのであろうか。

ところが，財団法人札幌遠友夜学校編『札幌遠友夜学校』昭和39年刊の中で，安藤勇逸が大正初期の夜学校の同窓生達を偲んで，「故人となった先輩では本間庄助，池田靴や，岡本飴や，大石菓子，足助先生から学校で貰った古本店の独立社の経営に当った興膳君等が思い浮かぶ」と語っている。このことから，田中清憲の長男の後，大正5年頃から夜学校の卒業生である興膳辰五郎によって貸本屋独立社は経営されたことがわかった。

### (2) 興膳辰五郎について

遠友夜学校は札幌独立基督教会の有志が創立した日曜学校を嚆矢とし，明治27年1月に新渡戸稲造が貧窮する家庭の児童のための普通教育の道を開くために始めたものである。

卒業生の興膳辰五郎とはどのような人物であろう。筆者は昭和60年の春，辰五郎の妹にあたる本田キクエ氏（当時92歳）にお会いして，お話をうかがうことができた。

辰五郎は興膳健助とマサキの5男として明治21年4月15日に生まれた。明治14年11月，祖父の儀三郎が61歳のときに，一家をあげ健助夫婦らと福岡県朝倉郡秋月より渡道する。

興膳辰五郎の家族，前列左から妻ふみ，二男努，長男勲，母マサキ，長女八代子，後列辰五郎と女中のみほえ（大正8年1月3日）

本田氏によれば辰五郎は小学校尋常科しか通っていないという。明治33年頃苗穂の製瓶工場に勤め，朝早くから夜遅くまでの仕事で提灯を持って通った。その後，中央郵便局の会計雇となり，その頃遠友夜学校に通うようになる。

彼は夜学校の模範生で，現在北海道立図書館に保管されている遠友夜学校の資料の中にも辰五郎の名前を散見することができる。

○明治36年12月25日　第9回奨励会第5回卒業式
　尋常科卒業（十名）特別賞　興膳辰五郎
○明治37年12月　試験成績
　特別賞　高一　興膳辰五郎
○明治38年度卒業及び受賞者姓名
　卒業生　特別賞　興膳辰五郎

辰五郎の長女，野川八代子氏からいただいた手紙には，「或る日床の間の棚の古い本箱に父の遠友夜学校時代の賞状がいっぱいはいっているのを見つけて兄弟で胸弾ませて見たことがありました。特等とか一等ばかりで外にもいろいろの賞状がありました。たった一枚二等というのがあり

まして父がその時は祖母にいたく叱られたと語っておりました」と回想している。

辰五郎は明治41年12月1日，月寒25連隊に現役兵として入営する(その年の6月足助は独立社を開業している)。43年には除隊し，翌年，叔父の世話で夕張に行く。ここでの仕事は炭鉱で工夫を入れる前にガスが出ていないかどうかを調べるという危険なものであった。真面目な性格から上司にもたいへん可愛がられた。

明治45年，夕張で大堀ふみと結婚する。翌年には長男勲が誕生，大正4年に父健助が札幌で死去したため，6月に辰五郎は家族とともに札幌に出ることとなった。札幌に出た頃は鉄道の購買部に勤め，その後に足助の独立社を引き受けることになったようである。

写真をみてもわかるように，彼は体格のがっしりした男らしい人物で，性格もやさしく兄弟姉妹の面倒もよくみた。また，字も上手で，特に毛筆は達筆であった。有島に煙草は飲まない方がよいといわれ，彼は生涯煙草や酒は口にしなかった。しかし，煙草は好きであったのであろう，着物の袖に煙草を入れて匂いを嗅いでいたという。

### (3) 興膳辰五郎と独立社

すでにみたように，彼は夜学校時代に成績優秀で何度も特別賞を受け，有島や足助にも可愛がられ大事にされた生徒の一人であった。『足助素一集』に収められた足助の手紙のなかにも興膳辰五郎の名前がみえる。

○明治39年8月17日　本間黒入君

夜学校の生徒知らぬものばかりと思ふて居たら豈斗らんやまだ中々知つて居るものがあるので愉快愉快。

先づ第一が瀬川の清松君，(少しハおとなしくなつたか,) 忘れやうとて忘れられぬ，鈴善，高栄，村幸，嘉助はん，紺正，五十福，山口，入道，鈴源，辰五郎，ハッピ(名が思ひ出せぬ，五十嵐と岡本との間の二人の名も忘れた，又五十嵐の左隣ハ山口といつたかね,)はこの頃勉強するか。

本田キクエ氏にお会いした年の秋，辰五郎の長女で神奈川県逗子市に住んでいらした野川八代子氏にもお会いすることができた。八代子氏は大正4年11月8日，札幌区大通西5丁目1番地で住まいも同じその貸本屋（店の名前は覚えがありません）で生まれております，中央創成小学校の2年か3年生くらいまで，そこにいたような気がいたします，と語った。貸本屋について，小さい頃の記憶を次のように思い返してくださった。

家の前に新川という川が流れていて向い側に奥田病院がありました。声楽家奥田良三氏のご生家と聞いております。店はそんなに小さくなかったと思います。本がびっしりと並んで

いて，何時も学生さんがいて，時には店の中がいっぱいの時もありました。父が店の机の前に座っていて，母が店の中をこまめに動いていた姿が今もおぼろげに目に浮かんできます。後年母が予科の学生さんたちに小母さん小母さんと慕われたと云っていたことがありました。店には両手にあまる天金の児童書がありました。アンデルセンとかイソップというような。

妻のふみが長女（八代子）を背に，長男（勲）の面倒をみながら貸本屋をまもった。貸した本が返ってこないとき，ひどく夫からしかられ本屋をやめてほっとしたと話していました。夜学校の生徒もよく店に来て，母はおやつを作って食べさせたりしました。

私が思いますに，お酒も煙草も嗜まず真面目で責任感のつよい父でしたから足助先生に目をかけて頂き，学業の成績もよかったのでその後の店をまかされたのではないでしょうか。

妹のキクエは大正元年に道庁の土木課技師であった本田市太郎と結婚し，大正7年8月には北見に移った。大正12年4月に再び札幌に戻ってきたときには，辰五郎はすでに貸本屋をやめていたという。

その頃の夜学校資料のうち，校長，各部長及び教師をもって組織され，毎月1回開催されていた月次会の『遠友夜学校記録／教師月次会記録　明41.4.21.～大5.2.』の中に独立社についての記述をみることができる。

○大正5年10月1日

独立社売却に関し野中時雄その衝にあたる

○大正5年11月19日

独立舎売却の件につき報告あり

また，昭和5年4月に刊行された『財団法人札幌遠友夜学校一覧』の同校の沿革欄には次のようにある。

○大正三年足助素一ハ奨学資金トシテ独立社（貸本店）ヲ寄附ス。独立社ハ自営シ，暫時ノ後之ヲ本校卒業生ニ売却シ，資金ヲ本校基本金ニ積立ツ。当時会計事務ハ安積一郎，半澤洵之レニ当ル。

資料からは売却した夜学校卒業生の名前はわからないが，先の安藤勇逸の回想などを総合すると，遠友夜学校の卒業生で成績も優秀であった興膳辰五郎が大正4年6月に札幌に戻ったことから，彼に白羽の矢がたち，足助の残した貸本屋独立社を任せることになった。と同時に独立社の

売却についても働きかけることになったが，買い手がみつからなかったため，そのまま辰五郎に売却することとし，経営を続けさせることになったのではないかと考えられる。

この貸本屋（大通西5丁目1番地）で長女の八代子と2男の努（大正7年），2女の國子（大正10年)が生まれているが，大正11年6月頃には貸本屋をやめて山鼻に移った。貸本屋をやめる原因はいったい何であったろうか。その頃には4人の子供達がいたので，貸本の収入だけでは生活することがむつかしくなっていたのかもしれない。

### (4) 興膳辰五郎のその後

貸本屋をやめた後，辰五郎は妹の夫とともにススキノで仕事を始めたりしたが成功せず，昭和2年には北都ゴム工業所（南5西5）に勤める。営業品目はゴム靴やゴムホースなどで，営業のため道内をくまなく歩いていたという。

翌3年8月，彼は北海道の寒冷を嫌い，農園を経営する夢を抱いて，家族とともに当時日本の委任統治領であった南洋群島パラオ島に渡った。札幌での最後の夜は夜学校時代からの友人であった鈴木源次郎の家で過ごし，東京の拓務省に寄り，横浜の高島桟橋より日本郵船の春日丸で日本を離れた。約2ヶ月を要してパラオ島に到着，彼はコロール島でパイナップル園を経営することとなった。

南洋方面への移民はすでに明治35年頃から始まっていた。大正8年に南洋群島がわが国の委任統治下におかれ，11年には南洋庁が設置されたことや内地の不況により，移住者が激増した。昭和5年頃の南洋各地に在留する邦人の数は3万5千人と報告されている。

内地と南洋群島間の航路は日本郵船株式会社に国が補助金を交付することにより，就航回数の増加や航路の延長が行われ，昭和7年には東廻線，西廻線，東西連絡線，サイパン線などが運行し，いずれも40日から50日を要した。興膳辰五郎一家がパラオに渡ったときに乗船した春日丸の総トン数は3,491トンという。

パラオでは農園の夢が挫折いたしまして二，三年くらい後に父は南洋庁につとめました。

土木事業の現場で監督の仕事をしておりましたが，大学出の方の設計の不備を指摘しても父の意見が通らず続行して，父の指摘通りになったことがあったりして，段々と信用され重用されるようになりました。

後で思ひ当りましたが，太平洋戦争の為の軍の諸施設で忙がしい仕事をしておりました。千人近い作業員は韓国の人，台湾の人も多かったようで，暴動になりそうな時，誰も手がつけられなくても父が行くと納まったと聞いております。

官庁などは特に学歴社会ですが，父は任官には到りませんでした。

最後は戦争勃発の日，現場見廻りで事故にあい首の骨を折りまして，翌日昭和十六年十二月九日五十三歳で殉職致しました。

父の趣味は庭づくりと植木をいじることでした。百坪くらいあった前庭にクロトンの植木の鉢を沢山並べて，めづらしい種類が次々増へて，わざわざそれを見に来る人もいらっしゃいました。内地から取り寄せた金魚を池で育てゝ孵化させたのもパラオでは父がはじめてだったと思ひます。

父は映画も終生好きでした。札幌にゐた時から年に何回か一家で映画見物に行ったり，銭函，朝里などへ海水浴へ連れて行って貰った思ひ出があります。

八代子氏の手紙には，パラオでの辰五郎の仕事ぶりに続けて父との思い出が記されていた。興膳辰五郎の戒名は南洋院興国智膳居士という。昭和21年になって家族は本土に引き上げ，昭和43年11月4日，妻ふみは子供達に看取られて，74歳でこの世を去っている。

## 3．田所篤三郎と創建社

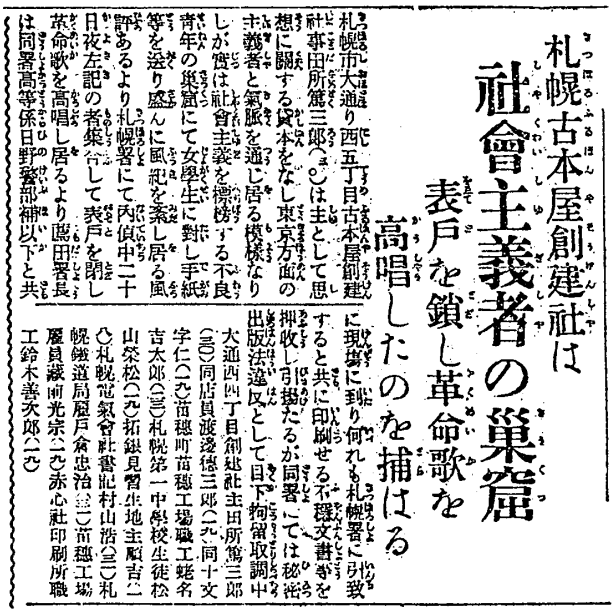
### (1)　創建社事件

大正11年の夏も終り頃，新川通りに面した，家具屋や食品雑貨店などが立ち並ぶ街角に一軒の貸本屋があった。柾葺き屋根には創建社書店という看板があがっている。

この家には毎夜のように詰襟服の学生や労働者，それに得体の知れぬ人々がどこからともなく集まってきては，酒を飲み議論を戦わせ，しまいには革命歌などを大声でがなりたてたりするのだった。

札幌署ではこの貸本屋に以前から目を付けていた。東京方面の社会主義者と気脈を通じてもいるようであるし，実は社会主義を標榜する不良青年達のたむろする恰好の場所となっていて，付近の住民からもあの家はいったい何なのだろうと囁かれていたからである。

内偵を続けていた札幌署高等係は，いよいよ9月20日夜，この貸本屋に踏み込んだ。文書を押収するとともに出版法違反で主人の田所篤三郎以下数人を引致した。まもなく彼らは釈放されたが，新聞には「札幌古本屋創建社は社会主義者の巣窟，表戸を鎖し革命歌を高唱したのを捕はる」と報じられた。目下拘留取調べ中として次の人々の名前が上っている。



札幌古本屋創建社は
社會主義者の巣窟
表戸を鎖し革命歌を
高唱したのを捕はる

札幌市大通り西五丁目古本屋創建社事田所篤三郎（〇）は主として思想に關する貸本をなし東京方面の主義者と氣脈を通じ居る模様なりしが實は社會主義を標榜する不良青年の巣窟にて女學生に對し手紙等を送り盛んに風紀を紊し居る風評あるより札幌署にて内偵中二十日夜左記の者集合して表戸を閉し革命歌を高唱し居るより廳田署長は同署高等係日野警部補以下と共に現場に到り何れも札幌署に引致すると共に印刷せる不穏文書等を押收し引揚たるが同署にては秘密出版法違反として目下拘留取調中

大通西四丁目創建社主田所篤三郎（NO）同店員渡邊徳三郎（ハ）同十文字仁（ニホ）苗穂町苗穂工場職工蛯名吉太郎（ヘ）札幌第一中學校生徒松山榮松（ト）拓銀見習生地主順吉（チ）札幌電氣會社書記村山浩（リ）札幌鐵道局屋戸倉忠治（ヌ）苗穂工場職員藏前光宗（ル）赤心社印刷所職工鈴木善次郎（ヲ）

北海タイムス　大正11年9月23日

| | |
|---|---|
| 大通西4丁目創建社主 | 田所篤三郎 (30) |
| 同店員 | 渡辺徳三郎 (19) |
| 同 | 十文字　仁 (19) |
| 苗穂町苗穂工場職工 | 蛯名吉太郎 (23) |
| 札幌第一中学校生徒 | 松山　栄松 (18) |
| 拓銀見習生 | 地主　順吉 (18) |
| 札幌電気会社書記 | 村山　　浩 (31) |
| 札幌鉄道局雇 | 戸倉　忠治 (31) |
| 苗穂工場雇員 | 蔵前　光宗 (19) |
| 赤心社印刷所職工 | 鈴木善次郎 (19) |

この貸本屋創建社は足助が経営していた貸本屋独立社の蔵書を，田所篤三郎(とくさぶろう)が引き継いだものであった。そしてこの田所こそ有島武郎の小説「酒狂」のモデルとなった人物であり，十文字仁という少年も「骨」の主人公として登場する。

### (2) 小説「酒狂」と「骨」のモデル

小説「骨」の主人公勃凸は中学校を中途退学し，友達の下宿にころがり込んだが，そこで一人の男に出会った。その男は「十二時近くなると毎晩下から沢庵漬を取りよせて酒を飲むのだったが，いかにも歯切れよささうなばりりばりりといふ音と，生ぬるいらしい酒をずるっと啜り込む音とが堪らなく気持がよかったのだ。……その沢庵漬で酒を飲むのが，あとで勃凸と腐れ縁を結ぶやうになった『おんつぁん』だった。……勃凸は三十歳そこそこのおんつぁんが生れる前からの父親のやうに思はれたのだった」，と勃凸こと十文字仁と田所の出会いが描かれている。

十文字は美満寿館近くの魚屋の息子で，「鼠の眼のやうな可愛らしい眼で，強度の近眼鏡」をかけ，田所のことをいつも「オンツァン」と呼んで慕っていた。いっぽう田所は出目であまり背は高くないが，肩幅のがっちりした男であった。

創建社をめぐる人々の様子を小説「骨」の中にみることができるので，少し長くなるがここに引用する。

> おんつぁんはやがて何処から金を工面したか，小細工物や，古着売の店の立ち列んだやうな町に出て小さな貸本屋を開いた。初めの中こそ多少の遠慮はしてゐたが，いつといふことなく勃凸はおんつぁんの店の仕事まで手伝ふやうになってゐた。
>
> おんつぁんも勃凸も仕事に興味が乗ると普通の人間の三倍も四倍も働いた。互に口もききあはない程働いた。従って売上げも決して馬鹿にはならない位あった。おんつぁんはそれで自分の好きな書物を買ひ入れた。けれどもおんつぁんの好きな書物は，あながち一般の読者

の好きな書物ではない。おまけに真先に貸本に楽書をするのがお客でなくておんつぁん自身だった。それがおんつぁんを黒表に載る人間にしようとは誰もが思はなかったらう。

どうかしたはずみを喰ふとおんつぁんも勃凸も他愛がなくなって，店に出入りする若者達と一緒にどこかに出かけて，売溜めを綺麗にはたいて，商売道具を手あたり次第に質草にするのが鬼りだった。

前列右から戸倉忠治の妻，戸倉の妻の妹，松山栄松，十文字仁
後列左から地主順吉，蛯名吉太郎，戸倉忠治（大正 15 年 1 月）

そのうちあの大乱痴気が起った。彼らが留置場にいる間に，「店は根太板まで引きはがされる程の綿密な捜索を受けてゐた。札幌で営業を停止されたばかりでなく，心あたりの就職の道は悉く杜絶」してしまうまでの痛手をこうむった。田所が家に帰ってみると，奥さんは二人の子供を（火事場から救ひ出すやうな気持で）連れて，小樽の実家に帰ってしまっていた。

やがて彼は「細君も子供も仲間も皆んな振り切って，たった一人の人間になろうと思い定め」，店を売り払うことにした。「酒狂」にはその間の事情を，「営業停止を喰ってから，本屋の店をたたき売ったら，八百円になった。いいさ，……本だけ千円も，入れたけどもな……嚊に五百円やって，残りで質さ請け出したら八十円残ったよ」といっている。

### (3)　田所篤三郎について

田所篤三郎は明治 26 年 5 月 15 日，田所直道，ウタの三男として札幌に生まれた。田所家は万延元年の頃には秋田県佐竹藩の郡奉行をしていた家柄で，『秋田武鑑』でも確認できるという名門である。また，北大教授・北海道教育大学長・帯広畜産大学長をされた田所哲太郎は篤三郎の長

兄にあたる。

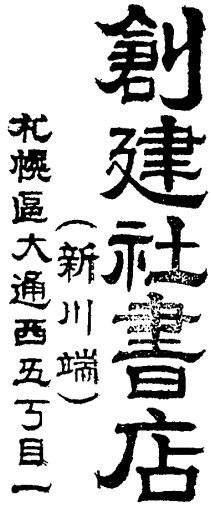
アメリカ留学中の田所（左）と
伊藤豊次（中央）

篤三郎は札幌第一中学校を経て大正4年仙台高等工業学校を卒業，翌年10月国鉄苗穂機関区に勤務，その頃坂口久栄（明治31年1月25日生）と結婚した。久栄は小樽でも指折りの材木商，新宮木材株式会社社長坂口茂次郎（和歌山県新宮市出身）の長女であった。

大正7年8月，アメリカ合衆国イリノイ州立大学に私費留学（機械専攻）しており，翌春，春洋丸で帰国すると麹町下六番町に有島を訪ねている。小説「酒狂」には「三年の過去になる，Bが始めて私をこの同じ書斎に訪ねて来たのは。米国の立派な背広と外套とを着こんで」とあり，そのことを裏付けている。彼は久栄との結婚を機に，坂口家には男子がいなかったことから坂口家に養子として入った。そのため，篤三郎の洋行にも坂口家が費用を出していた。大正9年，妻久栄とともに田所家に復縁して，その頃札幌狸小路で貸本屋を始めた。事件後は店を棚田義明に譲り帯広で小学校の代用教員などを勤めるが有島を頼って上京，その辺のことは有島の書簡に散見することができる。「酒狂」や「骨」の主人公は特異な性格として描かれているが，有島が晩年死と虚無への憧憬を強くしていく中で，田所の存在は非常に大きかったようで，このことは高山亮二氏の研究に詳しく記されている。

大正14年，田所は京都妙心寺の徳宗老師を訪ね，老師の紹介で那須雲厳寺の植木憲道に師事し参禅する。昭和4年，妻久栄の父の土地があった洞爺湖温泉町で簡易郵便局を開設，11月には伊

晩年の田所（右端），中央は植木憲道




創建社蔵書印

達市に金山を経営，白老や手稲・大滝などの鉱山や温泉の探鉱を行うなど，新たな活動の一面をみせている。

田所は身体が頑健であったが，晩年は胃癌に冒され東大の木元教授の執刀による手術を受け，伊豆韮山の真珠院で妻や植木とともに暮らしたが，その後再発して昭和 37 年 5 月 3 日死去，享年 69 歳であった。

### (4) 創建社書店について

昭和 61 年の夏，筆者は田所久栄夫人をはじめご子息達（当時大宮市在住）にお会いする機会を得たが，そのときお聞きしたことによれば大正 10 年の秋頃，田所は札幌の狸小路 4 丁目に古本兼貸本屋を開いたという。だが翌年 3 月，向かいの映画館神田館から出火，田所の店も類焼してしまう。このとき田所は貸本の仕入れと有島の援助を求めるために上京中で不在であった。まもなく新川通に移り再び貸本屋をはじめた。この新川通の店は創建社といったが，狸小路の店の名前はわからないということであった。

創建社の店の前で写した写真があるが，この店は後で紹介する再現社と同じ場所である。二つの写真を比べてみると，屋上に取り付けられた看板は同じであるが，屋根が柾葺きからトタンに，玄関のガラス戸などがそれぞれ替わっていることがわかる（写真の右側の建物は島田壽が経営した製本兼古書店で三光堂？といった）。

このとき二人目の子供が夫人のお腹の中にいた。田所は襟にかし本，創建社と白く染め抜いた半纏を着ている。また店先には自転車も置かれていて，お得意先回りをするときに必要なもので

創建社の店前で，田所，長女美津子，妻久榮（大正 11 年）

もあったろう。

昭和49年7月25日，文福茶屋（中央区北4西5）において開催された札幌古書店回顧座談会の席上で，高倉新一郎は田所の創建社の思い出を，「ここに新しい本で面白い本がありまして，……その中で，僕等島田清二郎の『地上』という本などを借りてきて読んだのを覚えておりますがね。そのときに，読まないで長いこと借りて返しに行くとね，怒られるんだ。俺はちゃんと貸本代を取るから損はない，だけどもお前達親の脛かじってて，それで無駄にこんな本遊ばせておく奴がいるかって，よく怒られたもんだ。変わった人でね」と語った。

最後に田所篤三郎のお墓は那須雲厳寺にあるとのことでる。

## 4．棚田義明と再現社

### (1) 棚田義明について

棚田義明は明治32年9月3日，棚田義一郎・サワの次男として札幌に生まれた。生家は浦川通（今の北1条東2丁目）で○棚（まるたな）という屋号の呉服商を営んでいた。明治39年の春，彼は中央創成尋常小学校に入学する。身体はあまり丈夫でなかったが，特に学校を休むというようなこともなく，常に級長を努めクラスのまとめ役であった。しかし，父親は尋常科卒業後は店を継がせるために，大阪あたりの呉服問屋に見習に出したいと考えていた。

だが，義明少年の懇願により庁立小樽商業学校に入学することが許される。そのため昼は学校，夜は戸出物産株式会社（中村利三郎社長）の住込み番頭というきびしい生活で，勉強は忙しい仕事のちょっとした暇をみて廊下でするというような有様であった。

小樽商業学校では越崎宗一と同級で，ノートを貸したり借りたりする仲でもあったという。また，同級生の山田一夫と二人誌を出したりした。卒業の年には棚田は学校に半分も出席することができず，卒業できるかどうかあやぶんでいたが，なんとか無事に卒業式を迎えることができた。

大正8年には父や姉の反対を押し切って小樽高商に進み，小樽病院付近にあった同級生の家で

再現社のカウンターで棚田義明（丸棚の半纏を着ている）

階段下の狭い部屋に下宿した。ところが長年の無理がたたってか，１年生の夏過ぎ肋膜を患い北辰病院に入院してしまう。病状は思わしくなく，翌２年生の春には高商を退学することになってしまった。１年ほど自宅で静養する生活が続き，このとき創建社事件と遭遇する。

大通西５丁目（新川通）にあった貸本屋創建社には，毎夜のように学生や労働者が集まって酒を飲み議論をたたかわせ，しまいには革命歌などを高唱したりした。またこの店は東京方面の社会主義者とも気脈を通じているようでもあり，札幌署高等係は以前から内偵を続けているところであった。９月20日（大正11年）の夜，札幌署は創建社に踏み込み出版法違反で主人の田所篤三郎以下数人を引致した。ほどなく田所達は釈放されるが貸本屋創建社は閉鎖されてしまう。

その頃棚田の病気はすっかり癒えていた。将来のことを考えると憂鬱で寂寥とした感情に襲われるのであった。療養中に彼は客として創建社に足を運んでいたから田所を知っていたが（借りていた図書の返却が遅れ，田所が棚田の家まで自転車で督促に来たことがあったという），それ以上に他人事でない共感と同情をもって創建社事件を受けとめた。

### ⑵　札幌短歌会と雑誌「路傍人」

棚田は鬱屈した気持を癒すため，教育会の図書館や古書店，貸本屋に足繁く通ういっぽうで，しだいに詩作や創作にのめりこんでいった。

大正10年，棚田は仲間達と三つの文芸誌の創刊にかかわっている。『北海道歌壇史』北海道歌人会，昭和46刊によれば，「札幌短歌会は，路傍人に倚る人々を主体に第一回を大正10年５月11日，中島公園南香園に開く。発起人は代田茂樹，藤村（宇野）千代，長野信男，東山末三，棚田照明，村田和郎等。」とある。発起人の代田茂樹（茂）は古書店尚古堂の２代目店主で，棚田もその中の一人として加わっている。また，長野信男は長野英樹の弟にあたる。

再現社の店前で（大正12年秋）

大正14年８月，鉄道省主催の「樺太観光団」の一人として汽船「高麗丸」で横浜港を出港した北原白秋と吉植庄亮は，帰途札幌に旅装をといた。25日，札幌短歌会は例会を兼ねた二人の歓迎歌会を南香園で開催する。この頃，幹事に秋葉安一（久城吉男）や近藤紫村，高松薫月が選ばれ，会報も出すようになる。

棚田が関わった二つめの文芸誌には，川崎尚らと創刊（大10.7.5発行）した「青空」青空詩社がある。創刊の同人は伊藤哀二郎，棚田愁人，小野賢治，川崎昇，川崎尚の５名。棚田は後年，札幌短歌会で川崎尚と初めて会ったと語っている。編集後記をみると，詩歌，評論，創作，

戯曲など「異色ある才を擁しながら雑誌に縁故が無い為,或ひは編輯者を知己に持たない為折角の力作も発表出来ずに居る人達に出来るだけ本誌を開放したいと望んでゐる」と棚田は書いている。

同人の伊藤哀二郎（久作）は棚田と小学校の同級生で，小樽海員養成所に進み船員となるが満州で死去。投稿者には垂石霞村（棚田呉服店の番頭）や伊藤多津夫（久作の弟で道庁勤務）など彼の友人や知己がいた。創刊号の巻末には6月28日南香園で開催された第2回札幌短歌会の詠草が掲載されている。だが，どのような事情からか「青空」の2号では伊藤と棚田が同人を降りてしまっている。

「青空」創刊とほぼ同じ時期に代田茂樹による文芸誌「路傍人」が創刊され，これにも棚田は関わっている。代田とは棚田呉服店に彼が垂石を訪ねてきたときに会ったのが初めてであったという。代田は後に札幌古書籍組合を結成し初代組合長になるが，それだけではなく戦後には積極的に出版にもかかわり，昭和24年には北海道文化奨励賞を受賞している。

昭和29年11月7日，代田は急逝するが，東本願寺別院で執り行われた葬儀の席上で，棚田は友人代表として弔辞を述べている。

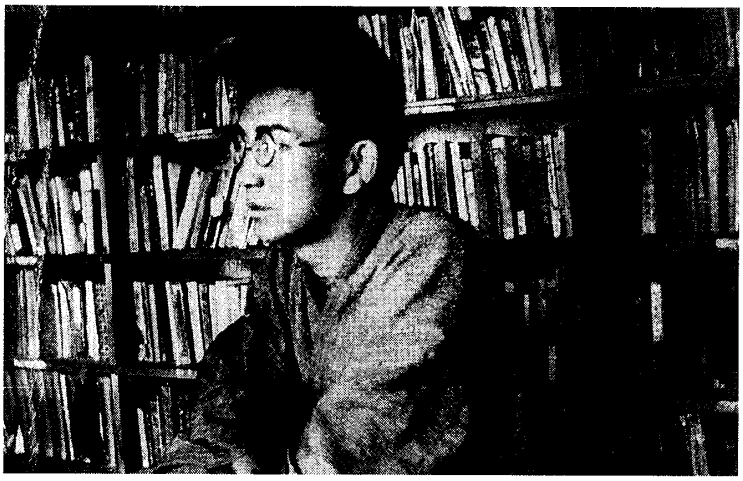
### (3) 貸本屋再現社について

まもなく，彼は父親から千円の金をもらって独立することに意を決し，田所の店を買い取り名前も「再現社」と改めて貸本屋を始めた。

彼が貸本屋を始めるようになった経緯は田所と顔見知りであったということだけでなく，札幌短歌会などで知っていた友人代田茂の影響が強かったようだ。

創建社事件は街でたいへん評判であったから，同じ場所に再現社という店ができたことを聞いて，行き交う人達はまた現れたかと囁きあうのであった。

彼は本こそ好きであったが，どのように店を経営したらよいものかとなると見当もつかない。近所の看板屋黄金堂の店員が安く看板を書いてくれて，ともかく貸本屋を開業した。白木にニス



再現社の書棚と棚田義明

再現社の店内で，前列右から棚田，伊藤辰雄（弟），臼井三郎，
臼井三郎の弟，後列右から黒沢道雄，秋葉安一，伊藤久作（兄）

を塗りカウンターを設け，新刊入荷を貼り出した。田所から買い取った店の棚には本がぎっしりと詰まっていて，白樺派の人々の本が多く，図書の扉には有島への献辞があるものもあった。（有島は自分宛てに来た献呈本を箱に詰めて創建社に送っていたようである）店の奥の4帖間は寝床に使用し，家財道具といえば七輪が1個で，有島の作った独立社の看板が七輪台となっていた。隣は大家の西村雑貨店で再現社の家賃は月30円であったという。

いろいろな客が店を訪れ，創建社時代からの客や内地の労働運動家などがいつも奥の4帖間に止宿していた。店の売上げは決して多くなかったから，やむをえず貸本の蔵書印を消して新川堂や札幌堂の古書店に売りに行き，その金を食費や飲み代に当てたりした。札幌署の高等係の刑事も三日にあげず店に現れた。

客の中には主人が店を空けたすきに，数少ない家財道具や衣服，店の本などを持ち去る者もいて，しだいに棚の本は少なくなり店も荒れだし生活は苦しくなっていった。

次に秋葉安一（久城吉男）の歌集から再現社や代田の店（尚古堂）を詠んだものを3首あげておく。

柳芽をもつ新川ぶちの再現社　アナキスト達そつと集まる
アカシアの枯葉がころがる夕方の代田の店に姿は見えない
短歌会だしにして店をあける茂樹と出かける新川の店

### (4) 雑誌「無産人」の発刊

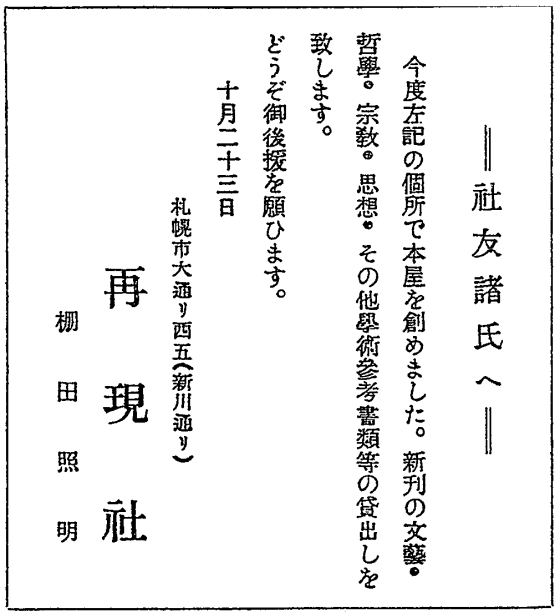
一方，再現社に出入りする客として知り合った戸倉忠治や蛯名吉太郎，橋浦泰雄その他の仲間と雑誌を出すことになった。それが『無産人』である。

札幌市立中央図書館には雑誌『無産人』の創刊号が所蔵されている。この雑誌はB5判50頁程

のもので，巻頭の「創刊の言葉」は棚田と戸倉忠治との合作であるというが，「我等は経済的に資本主義を××する。同時に其処に胚胎する一切の文化を××する。」というように，ところどころが伏字となっていて，それだけでもこの雑誌の生みの苦しみをうかがい知ることができるようである。

雑誌奥付の発行日は大正14年5月11日，発行所は無産人社(南2条西10丁目，これは友人の伊藤久作の借家の住所であるという)，編輯兼発行人は棚田義明とある。表紙のデザインやカットは橋浦泰雄が引き受けている。内容は評論，創作，詩・短歌に分かれていて，以下に目次を見てみよう。

(評　論)　プルウドンの生涯……岸波　栄（臼井三郎）
　　ヒロイズムを排す……左血夫
　　一労働者よりサラリーマンへ……田中鉄造
　　偶感四つ……左血夫
　　「アンポイナ」から ……石坂肇章
(創　作)　彼の断片……橋浦泰雄
　　更　夜……多奈木照雄（棚田義明）
　　痛ましき存在（戯曲）……鈴木了空
　　彼の自滅……三芳左血夫（戸倉忠治）
(詩・短歌)　俥夫の言葉……井上松男
　　検束の歌……小野　鉱（秋葉安一）




再現社の広告（雑誌「路傍人」より）

雑誌「無産人」創刊号

旅すがら……橋浦泰雄
休み日の晝……北方人生
樺太にて……宇野　淳（地主　淳）

棚田は多奈木照雄というペンネームで「更夜」という創作を発表していて，これには貸本屋をやめるまでに追い込まれた窮状と心の動きが，奥の4帖間の寂莫とした情景とともに描かれている。

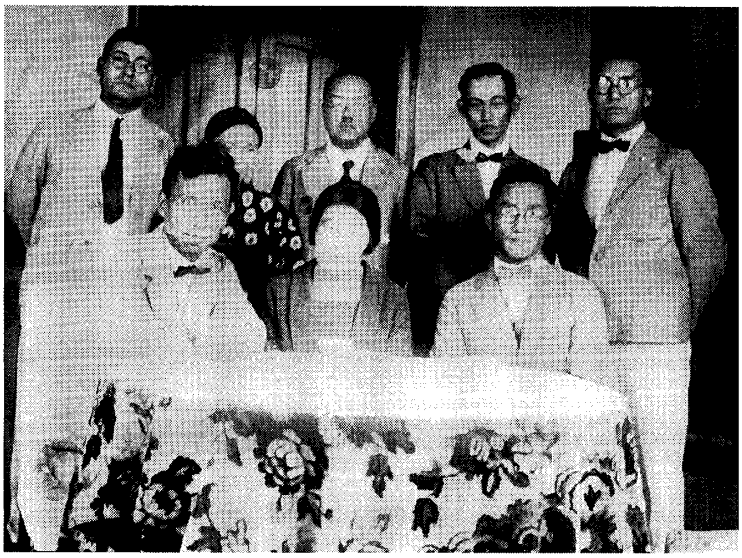
すべてに詰まってしまっている彼に「それなら月末に五拾円だけ貸してやる……」といって引き受けてくれた頼みの秋本というのは友人秋葉安一のことであり，「民衆亭」に行ってたらふく豚なべでも突つきたいといっている「民衆亭」というのは札幌では古い洋食屋である米風亭のことである，と棚田は語った。

「より力強く，より善く，生きたくてたまらない」という叫びのなかから生まれたこの雑誌は，創刊号で廃刊となってしまう。

### (5) 再現社の閉店

そんなある日，伊藤という小学校の同級生が店先に現れ，そのまま奥の部屋に居着き，挙句の果てには隣り近所から物や金を借りて姿を晦ましてしまった。月末になると借金取りがつぎつぎとやって来るし，店を売り払って金を作るよりしょうがなくなり，友人の世話で奥出三郎に店を譲ることにした。大正14年2月のことである。

再現社をやめて1年程すると，棚田は札幌短歌会の同人で北海タイムス社にいた千田迅一郎や鈴木札幌署高等係主任の口添えで，今後一切の社会運動に関係しないという誓約書を書いて，北



北海タイムス社の同僚，前列右から佐々木，熊谷たまの
阿倍虎次，後列右端，棚田義明

海タイムス社に勤めることになる。千田は再現社時代によく店を訪れ，その頃は警察回りの社会部の記者であった。雑誌「無産人」を一緒にやった戸倉忠治も北海タイムス社の校正係長となっていた。棚田は昭和4年，30歳で小学校時代の同級生の妹，佐々木サダと結婚した。

これまでみてきたように棚田が貸本屋再現社を経営したのは2年余のごく短い期間であったが，虚無感に囚われ懊悩する青春の一時期，経済的には苦しくとも彼を真摯にさせ，スプリングボードとなったのが再現社の営みであり，雑誌「無産人」の発行であった，といえるであろう。

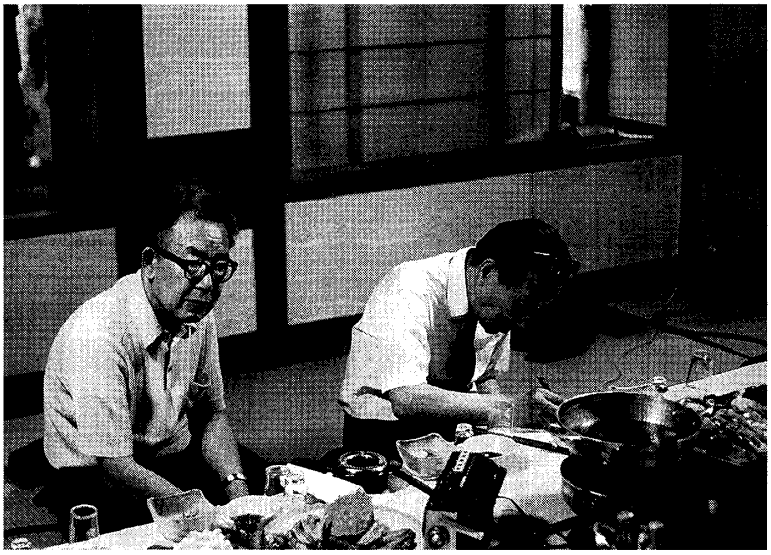
## 5．奥出三郎と白羊社

大正14年2月，奥出三郎は棚田から店を買い，名前も「白羊社」と改めて貸本屋を続けた。棚田によれば，秋葉安一の紹介で奥出三郎を知り，彼の奥さんの両親と店を譲る交渉を直接したと語っている。

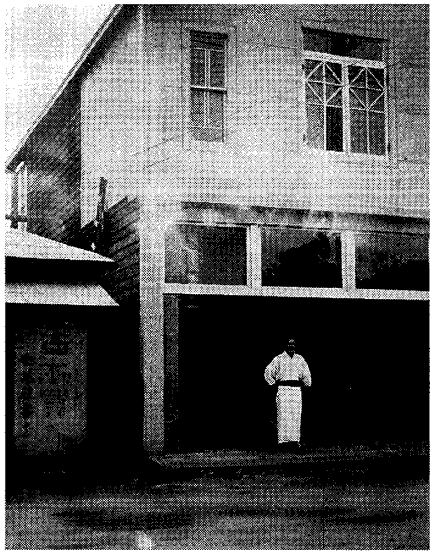
大正15年6月1日，白羊社（札幌市大通西5丁目1番地）から秋葉安一（久城吉男）による歌誌「大衆短歌」創刊号，定価30銭を刊行する。これは秋葉の個人雑誌で，次号からは広く読者の歌を掲載するといっているが，この雑誌は残念ながら1号しか発行されなかったようである。

同年4月2日の早朝，札幌署は出版法違反の容疑で78名におよぶ大量の家宅捜査を行った。その中には普通選挙法（大正14年5月）の実施を前に，無産政党の組織母体となる目的で創立された政治研究会の北海道支部幹事，太田栄太郎や札幌合同労働組合長中村善太郎，白羊社の奥出三郎もいた。「左傾団体に札幌署の大検挙」と新聞は報じた。このとき，同時に大学関係では玉貫光一の他に社会科学研究会のメンバーであった野口昌祥や，東隆それに高倉新一郎も検束されている。

白羊社はその後もたびたび特高の視察を受け，昭和2年の末，ついに店を閉じた。以前に一度，



札幌古書店回顧座談会席上において，奥出三郎（左）と
高倉新一郎（昭和49年7月25日）



古書店新川堂（左端に白羊社の
古本買入看板がみえる）

奥出氏にお会いしたとき，奥様が長男のお産のため昭和2年の11月頃か，店をやめて親元へ戻ったのですと話された。そのとき，店の本は借家であった空家に収めましたとも語られた。そのため，奥出による白羊社の経営は実質2年余の短い期間であったことがわかる。

足助素一が明治末期，北都札幌にはじめた貸本屋は幾人もの手で引き継がれ，奥出三郎が店を閉じるまで約20年間にわたって生き続けたのであった。

## ま と め

このようにみてくると，明治末期から大正期，札幌に図書館施設といえば北海道帝国大学附属図書館や北海中学校の北駕文庫を別にして，教育会図書館と北九条尋常高等小学校附属通俗図書館しかなかったとき，足助の貸本屋独立社とこれを継いだ店達はやはり特異な存在であったことが知られる。何故，独立社やこれを継いだ創建社，再現社，白羊社といった店がそのような存在となり得たのかという理由として次のようなことが考えられる。

先の教育会図書館や北九条尋常高等小学校附属通俗図書館はいずれも私立の図書館施設であって，やっと大正15年12月1日，行啓記念北海道庁立図書館が北1条に開館する。札幌区教育会図書館は北海道教育会の解散にともない，これを引き継いだものであるが，庁立図書館ができるまでは，長く公共図書館としての役割を果たしてきた。

その歴史を振り返ってみると，大正11年になって初めて教育会の会員に図書の館外貸出(有料)をはじめており，大正14年度の統計をみても，貸出延べ冊数1,257冊（1,046人）という低調なものであった。その原因は蔵書数の少なさ（16,000冊程度）と内容が教育関係の図書に偏っていた（蔵書数の中には教科書の数が含まれている）ことにある。そのため，教育会などの図書館では読書欲の旺盛な青年達の興味を充分に満たすことができなかった。

もう一つは，足助もそうであったが，独立社を継いだ人々が貸本屋を経営したのは，共に20歳代のことであったということ。そのため，自らが思想の形成期にあり，店主と利用者といった域を越えて親しい交わりを持つこととなった。

そのなかで，利用者に合った図書を推薦することもでき，図書館業務でいうところの読書指導のようなことも可能となったし，利用者の希望を受けて新しい図書を棚に揃えるリクエストの受付のようなことも行われていた。今日の公共図書館の司書のような役割を彼らは果たしていたのである。

もっといえば，彼らにとっての貸本屋の経営は勿論生活の糧を得るためのものではあったが，それ以上に青年達の思想形成に些かでも貢献しているという自負心を持っていた。

筆者の手元に大正15年4月現在の『全国書籍商組合員名簿』がある。これをみてみると，北海道書籍雑誌商組合員のうち札幌市の組合員数は72であるが，そのなかには棚田義明や代田亀次郎の名前もみえるため，古書店や貸本店も含まれており，その他兼業の書店や雑誌を多く扱う店も

あるようである。このことから，大正末期頃，札幌市内に書店は50店程と考えてよいかと思うが，しかも学術書を揃えることができたのは富貴堂や維新堂など街中の数少ない店であった。

とすれば，教育会の図書館でも満たされず，新刊書を買い求める財力も持たない若者達の読書欲を満たしたのは独立社やこれを継いだ貸本店であった。それに，明治・大正期はまだ学問領域の分化が未発達であったことから，独立社のような高級貸本店が存在することができたと思われる。

独立社について語る人々は誰も，主人は無愛想とか奇人と表現しているが，この店が思想の発展途上にあった青年達に与えた影響ははかりしれないものがあったということができる。

## 参考文献一覧


**○独立社**

秋田雨雀，吹田順助，末光績　『足助素一集』　足助たつ　昭6
奥田義正　『青年寄宿舎五十年史』　昭24
財団法人札幌遠友夜学校　『札幌遠友夜学校』　昭39
———　『財団法人札幌遠友夜学校一覧』　昭5
———　『事業一覧』　財団法人札幌遠友夜学校　昭11
———　『遠友夜学校記録　教師月次会記録』　明41.4.21-大5.2
瀬沼茂樹　『明治文学研究』　法政大学出版局　昭49
吹田順助　『旅人の夜の歌：自伝』　講談社　昭34
原田三夫　『思い出の七十年』　誠光堂新光社　昭41
石附忠平　『切株の跡』　北海道教育評論社　昭29
札幌市教育委員会　『札幌の短歌』(さっぽろ文庫9)　北海道新聞社　昭54
吉崎研亮　『民衆の太陽』　吉崎刊行会（鎌倉材木座）　大7
〃　「民衆派の短歌」創刊号　鎌倉草木社　大8
石附忠平　思い出さるゝ四五　『北海道札幌師範学校五十年史』p284-287　昭11
小泉苳三　埋れた歌集に就て　「短歌研究」　p227-233　昭13.1
瀬沼茂樹　足助素一と叢文閣　「本」1巻2号　p8-13　昭39
沓掛伊佐吉　大正の貸本屋　「日本古書通信」324号　p8-9　昭46
大島幸吉　図書館，読書と私　「オコック会誌」11号　p1-5　昭11
藤島　隆　貸本屋「独立社」を詠う　「日本古書通信」50巻12号　p5-6　昭60
〃　貸本屋独立社とその系譜(1)　「北の文庫」8号　p1-14　昭60
〃　貸本屋独立社とその系譜(2)　足助素一と独立社の周辺　「北の文庫」11号　p7-15　昭61
〃　貸本屋独立社をめぐる人々　「北の文庫」23号　p19-21　平6

**○創建社**

田所篤三郎　『有島武郎の思出』　共成舎（東京）　昭2
有島武郎　心に沁みる人々　「中央公論」臨時増刊　大11
〃　酒狂　「泉」2巻1号　大12.1
〃　骨　「泉」2巻4号　大12.4
古川洋三　初代酒狂の想い出　「北の話」p7-10　凍原社　昭52.2

高山亮二　有島武郎晩年の作品「酒狂」・「骨」の成立をめぐって：そのモデルを中心として　「北方文芸」128号　p 11-32　昭53
内田　満　『酒狂』とその周辺：「私小説」への逸脱　『有島武郎：虚構と実像』　p 187-203　有精堂　平8
藤島　隆　札幌創建社のこと　「北方文芸」205号　p 4-6　昭60
小竹英夫　「独立社」及び「創建社」の印のある本　「北の文庫」11号　p 4-6　昭61

**○再現社**

秋田雨雀　『秋田雨雀日記II』　未来社　昭40
———　『北海道歌壇史』　北海道歌人会　昭46
木原直彦　『北海道文学史　大正・昭和戦前編』　北海道新聞社　昭51
秋葉安一　『岩石をたゝいて』　秋葉つた　昭62
久城吉男　『新緑の峡』　秋葉力編集　秋葉亨発行　昭63
棚田義明　「無産人」創刊号　無産人社（札幌）　大14
川崎　尚　「青空」創刊号　青空詩社（札幌）　大10
———　雑誌「路傍人」
藤島　隆　再現社貸本店と雑誌「無産人」　札幌市立図書館報「らいらっく」173号　p 4-5　昭60

**○白羊社**

久城吉男　「大衆短歌」創刊号　白羊社　大15
更科源蔵　『青春の原野』　p 180-181　北海タイムス社　昭62

**○北海道の貸本屋**

渡辺惣蔵　『北海道社会運動史』　レポート社　昭41
堅田精司　『北海道社会運動家名簿仮目録』　昭48
———　『七十年の歩み：富貴堂小史』　富貴堂　昭43
島木健作　札幌　『札幌随筆集』（さっぽろ文庫42）　p 124-131　昭62
菅原英一・藤島隆共編著　『北のアンティクアリアン：札幌古書店の足跡』　北の文庫　昭63
藤島　隆　明治期北海道の貸本屋：富貴堂と独立社を中心に　「北海道立図書館報」　99号　p 3-6　昭55
藤島　隆　ノート北海道の貸本屋　「貸本文化」13号　p 1-10　貸本文化研究会　昭61
〃　ノート北海道の貸本屋（補遺）「貸本文化」15号　p 1-5　昭62
亀井秀雄　貸本屋さんの文学史　「北の文庫」41号　p 23-50　平17

〈資　料〉

# 独立社蔵書目録

(明治43年1月現在)

## 法律経済文学及雑著（主要書目）

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 織田　萬 | 法学通論 |
| 富井　政章 | 民法原論 |
| 横田　秀雄 | 物権法 |
| 〃 | 債権総論 |
| 清水　澄 | 憲法篇 |
| 穂積　八束 | 憲法講義中央大学42年 |
| 美濃部達吉 | 日本行政法　第1巻 |
| 早稲田大学 | 法制経済講話 |
| 津村　秀松 | 国民経済学原論　2巻 |
| 気賀　勘重 | 経済学原論（フィリボヴィッチ） |
| 福田　徳蔵 | 経済学研究 |
| 〃 | 経済学講義 |
| 田尻稲次郎 | 財政と金融 |
| 大日本文明協会 | 社会之経済的基礎 |
| 〃 | 英国産業革新論 |
| 堀江　帰一 | 最近経済問題叢書1巻 関税問題 |
| 桑田　熊蔵 | 最近経済問題叢書2巻 工場法と労働保険 |
| 新渡戸稲造 | 増訂農業本論 |
| 伊藤　清蔵 | 農業経営学 |
| 永井柳次郎 | 英国殖民発展史 |
| 戸田　海市 | 我独逸観 |
| 内務省 | 田圃都市 |
| 木下　義道 | 田舎の日本 |
| 大西　祝 | 論理学 |
| 〃 | 倫理学 |
| 〃 | 西洋哲学史　2巻 |
| 〃 | 良心起原論 |
| 〃 | 思潮評論 |
| 〃 | 論文及歌集 |
| 元良勇次郎 | 論文集 |
| 桑木　厳翼 | 時代と哲学 |
| 〃 | ニーチェ氏倫理説一般 |
| 木村鷹次郎 | プラートン全集 |
| 白隠和尚 | 白隠和尚全集 |
| 法然上人 | 法然上人全集 |
| 親鸞上人 | 親鸞上人全集 |
| 日蓮上人 | 日蓮上人全集 |
| 中江　兆民 | 兆民文集 |
| 〃 | 一年有半 |
| 北村　透谷 | 透谷全集 |
| 三宅雄次郎 | 宇　宙 |
| 〃 | 宇宙の謎（ヘッケル） |
| 土井　晩翠 | 衣裳哲学（カーライル） |
| 高瀬武次郎 | 老荘哲学 |
| 釈　宗演 | 一字不説 |
| 〃 | 無門関講義 |
| 前田　慧雲 | 仏教要義と文学 |
| 〃 | 仏教人生観 |
| 田中　茂穂 | 人類の由来（ダーキン） |
| 〃 | 種の起源（同上） |
| 丘　浅次郎 | 進化論講義 |
| 〃 | 進化と人生 |
| 〃 | 人類の将来（中央公論） |
| 加藤　弘之 | 自然界の矛盾と進化 |
| 丘外四名家 | 最新思潮講話 |
| 大澤　謙二 | 結婚新説 |
| 澤田順次郎 | 雌雄分性の原理及応用 |
| 片山　正雄 | 男女と天才（ワイニンゲル） |
| 高橋　五郎 | ベーコン論説集 |
| 〃 | 処世論（エマーソン） |
| 〃 | 釈迦論 |
| 大谷　正信 | 恵馬遜傑作集 |
| 波多野精一 | 基督教の起源 |
| 佐藤　一斎 | 言志四録　4巻 |
| 大日本文明協会 | 国民性情論 |
| 西田　敬正 | 益軒楽観 |
| 黒岩　周六 | 天人論 |
| 綱島　梁川 | 病間録 |
| 〃 | 回光録 |
| 〃 | 寸光録 |
| 〃 | 病窓雑筆 |
| 内村　鑑三 | 保羅の復活 |
| 〃 | 櫟林集 |
| 〃 | 求安録 |
| 〃 | 地人論 |
| 内村　鑑三 | 愛　吟 |
| 〃 | 警世雑著 |
| 〃 | 興国史談 |
| 〃 | よろづ短言 |
| 〃 | 歓喜と希望 |
| 〃 | 英文予は如何にして基督信徒となりしや |
| 〃 | 英文日本の代表的人物 |
| 新渡戸稲造 | 武士道 |
| 〃 | 随想録 |
| 〃 | 帰雁の芦 |
| 加藤　直士 | 文芸と宗教 |
| 〃 | 我宗教（トルストイ） |
| 〃 | 我懺悔（同上） |
| 高山林次郎 | 樗牛全集　5巻 |
| 島村　抱月 | 近代文芸の研究 |
| 松原　至文 | 近世大陸文学史 |
| 夏目　漱石 | 文学評論 |
| 坪内　逍遥 | 文学その折々 |
| 慶応　義塾 | 正続大国民（オレール） |
| 松橋吉之助 | 思念術 |
| 平井　金三 | 心霊の現象 |
| 住谷　天来 | 英雄崇拝論（カーライル） |
| 土井　晩翠 | 奈翁性格論（テインス） |
| 正木　照蔵 | ジョンブル（オーレル） |
| 藤井　繁一 | 女殿下（オーレル） |
| 安部　磯雄 | 理想の人 |
| 〃 | 理想の青年 |
| 和田垣謙三 | 青年諸君 |
| 中村　直正 | 西国立志篇 |
| 村田　勤 | 宗教改革史 |
| 綱島　梁川 | 耶蘇伝（ルナン） |
| 井上哲二郎 | 釈迦牟尼伝 |
| 山室　軍平 | ブース大将伝 |
| 徳富　蘇峰 | 日曜講壇 |
| 〃 | 天然と人 |
| 〃 | 吉田松蔭 |
| 幸田　成友 | 大塩平八郎 |
| 中原　邦平 | 伊藤公実録 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 岡谷　繁実 | 名将言行録　4巻 |
| 山路　愛山 | 源頼朝 |
| 〃 | 足利尊氏 |
| 〃 | 豊太閤　2巻 |
| 〃 | 加藤清正 |
| 〃 | 孔子論 |
| 〃 | 愛山文集 |
| 大町　桂月 | 鎌倉武士 |
| 幸田　露伴 | 頼　朝 |
| 鳥谷部春汀 | 春汀全集　3巻 |
| 竹越與三郎 | 二千五百年史 |
| 〃 | 三叉文集 |
| 田岡　嶺雲 | 明治叛臣伝 |
| 勝　　安房 | 海舟日誌 |
| 富田　高慶 | 報徳記 |
| 福住　正兄 | 二宮翁夜話 |
| 〃 | 済民記 |
| 札幌農学校カメラ会 | 二宮翁研究 |
| 平出鏗次郎 | 敵　討 |
| 三木　愛花 | 日本角力史 |
| 座子　愛子 | 伏屋の曙　2巻 |
| 皆川　正禧 | 己が生涯（ヘレン・ケラー） |
| ジョン・バチェラー | アイヌ人及其説話 |
| 山方　香峯 | 新武士道 |
| 池邊　義象 | 宮本武蔵 |
| 〃 | 武士道美談 |
| 伊藤　銀月 | 秀吉と家康　2巻 |
| 三宅　花圃 | 花の趣味 |
| 田中　貢一 | 花物語 |
| 半澤　　洵 | 雑草学 |
| 一戸　直蔵 | 月 |
| 〃 | 星辰天文学 |
| 岸上　謙吉 | 海と魚 |
| 志賀　重昂 | 大役小志 |
| 〃 | 日本風景論 |
| 〃 | 河及湖澤 |
| 櫻井　鴎村 | 欧州見物 |
| 姉崎　嘲風 | 花つみ日記 |
| 杉村楚人冠 | 大英遊記 |
| 〃 | 半球周遊 |
| 〃 | 七花八裂 |
| 渋川　玄耳 | 世界見物 |
| 〃 | 東京見物 |
| 〃 | 上方見物 |
| 〃 | 従軍三年 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 徳富健次郎 | 順礼紀行 |
| 田村　　哲 | 外遊九年 |
| 日野　　彌 | 伊犁紀行　2巻 |
| 河口　慧海 | 西蔵旅行記　2巻 |
| スエン・ヘディン | 中央亜細亜探検記 |
| 橘　　南谿 | 東西遊記2巻 |
| 志村　烏嶺 | ヤ　マ |
| 吉江　孤雁 | 高　原 |
| 千葉　秀浦 | 外人の見たる日本 |
| 小原　頼之 | 育児日記親ごゝろ |
| 山縣五十雄 | 英詩研究 |
| 西村　酔夢 | 西詩の薫 |
| 巌谷　小波 | 世界お伽噺 |
| 〃 | 世界お伽文庫 |
| 〃 | 世界お伽草紙 |
| 〃 | お伽花籠 |
| 高浜　虚子 | 俳諧馬の糞 |
| 〃 | 俳人蕪村 |
| 〃 | 新写生文集 |
| 沼波　瓊音 | 俳論史 |
| 坂本四方太 | 続写生文集 |
| 子規鳴雪等 | 蕪村句集講義春夏秋冬 |
| 〃 | 蕪村遺稿講義　同 |
| 〃 | 芭蕉翁一代鏡 |
| 尾崎　紅葉 | 蕉門十哲句集 |
| 寒川　鼠骨 | 十哲俳句評釈 |
| 佐藤　紅緑 | 俳句新註 |
| 〃 | 子規句集 |
| 坂井久良岐 | 川柳久良岐点 |
| 国木田独歩 | 武蔵野 |
| 〃 | 独歩集 |
| 〃 | 独歩集　第2 |
| 〃 | 運　命 |
| 〃 | 涛　聲 |
| 〃 | 渚 |
| 〃 | 語らぬ恋 |
| 〃 | 愛弟通信 |
| 〃 | 病状録 |
| 〃 | 欺かざるの記　2巻 |
| 国木田治子共著 | 黄金の林 |
| 夏目　漱石 | 漾虚集 |
| 〃 | 我輩ハ猫デアル　3巻 |
| 〃 | 鶉範 |
| 〃 | 虞美人草 |
| 〃 | 草　合（ママ） |
| 〃 | 三四郎 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 夏目　漱石 | それから |
| 島崎　藤村 | 破　戒 |
| 〃 | 緑葉集 |
| 〃 | 春 |
| 〃 | 新片町より |
| 〃 | 藤村集 |
| 〃 | 詩　集 |
| 田山　花袋 | 花袋集 |
| 〃 | 花袋集　第2 |
| 〃 | 生 |
| 〃 | 妻 |
| 〃 | 田舎教師 |
| 〃 | インキツボ |
| 小栗風葉共編 | 二十八人集 |
| 高浜　虚子 | 凡　人 |
| 〃 | 鶏　頭 |
| 〃 | 俳諧師 |
| 〃 | 続俳諧師 |
| 〃 | 虚子小品 |
| 徳富健次郎 | 寄生木 |
| 〃 | 不如帰 |
| 〃 | 黒　潮 |
| 〃 | 思出の記 |
| 〃 | トルストイ |
| 〃 | 自然と人生 |
| 〃 | 青芦集 |
| 〃 | 青山白雲 |
| 〃 | 探偵異聞 |
| 森田　草平 | 煤　烟 |
| 正宗　白鳥 | 落　日 |
| 〃 | 二家族 |
| 〃 | 白鳥集 |
| 〃 | 何処へ |
| 〃 | 誰の罪業 |
| 永井　荷風 | 荷風集 |
| 〃 | あめりか物語 |
| 木下　尚江 | 荒　野 |
| 〃 | 労　働 |
| 〃 | 墓　場 |
| 〃 | 乞　食 |
| 〃 | 霊か肉か　2巻 |
| 〃 | 良人の自白　4巻 |
| 〃 | 火の柱 |
| 〃 | 飢　渇 |
| 中村　春雨 | 信仰（アンドレーフ） |
| 〃 | 無花果 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 中村　春雨 | 炬　火 |
| 泉　　鏡花 | 鏡花集 |
| 〃 | 神餐 |
| 〃 | 婦系図　2巻 |
| 〃 | 風流線　2巻 |
| 〃 | 柳　莒 |
| 〃 | 鏡花小品 |
| 鈴木三重吉 | 千代紙 |
| 真山　青果 | 南小泉村 |
| 樋口　一葉 | 一葉全集 |
| 白柳　秀湖 | 黄　昏 |
| 〃 | 新　秋 |
| 尾崎　紅葉 | 鐘楼守（ユーゴー） |
| 〃 | 紅葉全集　6巻 |
| 〃 | 多情多恨 |
| 〃 | 煙霞療養 |
| 〃 | 金色夜叉　合本 |
| 小栗　風葉 | 終編金色夜叉 |
| 〃 | 脚本金色夜叉 |
| 〃 | 忿　怒 |
| 〃 | 天　才 |
| 〃 | 青　春　3巻 |
| 〃 | 風葉集 |
| 幸田　露伴 | 露伴叢書　2巻 |
| 〃 | 天うつ浪　2巻 |
| 〃 | はるさめ集 |
| 〃 | 五重の塔 |
| 〃 | 心のあと出慮 |
| 坪内　逍遥 | ハムレット（シェーキスピーア） |
| 〃 | 作と評論 |
| 〃 | 牧の方 |
| 〃 | 桐一葉 |
| 〃 | 菊と桐 |
| 〃 | 新曲金毛狐 |
| 〃 | 新曲浦島 |
| 黒岩　涙香 | 巌窟王　4巻 |
| 〃 | 噫無情　2巻 |
| 〃 | 山と水　2巻 |
| 〃 | 野の花　2巻 |
| 〃 | 郷土柳子 |
| 〃 | 花あやめ |
| 〃 | 人の妻 |
| 〃 | 雪　姫 |
| 〃 | 捨小舟　3巻 |
| 〃 | 幽霊塔　3巻 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 小杉　天外 | コブシ　3巻 |
| 柳川　春葉 | 女の望 |
| 〃 | 新夫婦　2巻 |
| 〃 | 跫　音 |
| 菊池　幽芳 | 己が罪　3巻 |
| 〃 | 乳姉妹　2巻 |
| 〃 | 夏　子　2巻 |
| 〃 | 月　魄　2巻 |
| 〃 | 筆　子　2巻 |
| 小笠原白也 | 嫁が淵 |
| 大倉　桃郎 | 旧山河 |
| 〃 | 琵琶歌 |
| 広津　柳浪 | 人 |
| 〃 | 柳浪叢書 |
| 〃 | 絵師の恋　2巻 |
| 〃 | 自暴自棄　2巻 |
| 〃 | 世　間　2巻 |
| 田口　掬汀 | 女夫波 |
| 〃 | 伯爵夫人　2巻 |
| 〃 | 怪　光　2巻 |
| 徳田　秋声 | 同朋三人 |
| 〃 | 結婚難 |
| 矢野　龍渓 | 浮城物語 |
| 〃 | 新社会 |
| 村井　弦斎 | 日の出島　合本 |
| 〃 | 食道楽　4巻 |
| 〃 | 小ねこ |
| 後藤　宙外 | 月に立つ影　3巻 |
| 村上　浪六 | 稲田一作 |
| 〃 | 八軒長屋　3巻 |
| 〃 | 浪六傑作集　2巻 |
| 横井　時敬 | 模範町村 |
| 押川　春浪 | 冒険小説 |
| 坪井正五郎 | うしのよだれ |
| 堀内　新泉 | 人の兄　2巻 |
| 〃 | 全力の人　2巻 |
| 〃 | 観音堂　2巻 |
| 田村　松魚 | 北米の花 |
| 須藤　光暉 | 愚禿親鸞 |
| 福本　日南 | 元禄快挙録 |
| 田中　萬逸 | 死生の境 |
| 塚原　渋柿 | 渋柿叢書 |
| 〃 | 由井正雪 |
| 〃 | 金忠輔 |
| 〃 | 家康公（既刊2巻） |
| 〃 | 長篠合戦 |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 塚原　渋柿 | 大石良雄　3巻 |
| 〃 | 淀　殿　3巻 |
| 〃 | 天草一揆　2巻 |
| 〃 | 木村重成 |
| 〃 | 水野越前守 |
| 〃 | 葵と桐　2巻 |
| 〃 | 加藤清正 |
| 〃 | 大鳥逸平　2巻 |
| 〃 | 石川五右衛門　2巻 |
| 〃 | 山崎合戦 |
| 〃 | 小牧山合戦 |
| 緑園（又碧瑠璃園） | 大石内蔵助 |
| 〃 | 乳母政岡　3巻 |
| 〃 | 吉田松蔭（既刊1巻） |
| 〃 | 銭屋五平（同上） |
| 〃 | 白河楽翁公　2巻 |
| 〃 | 後藤又兵衛　2巻 |
| 〃 | 後藤隠岐 |
| 〃 | 二宮尊徳　3巻 |
| 〃 | 渡辺崋山　2巻 |
| 竹　香　生 | 真田幸村 |
| 山崎　紫紅 | 史劇十二曲 |
| 信夫　恕軒 | 赤穂義士実談 |
| 桃中軒雲右衛門 | 雪の曙義士銘々伝　3巻 |
| 〃 | 義士本伝 |
| 幸田露伴・尾崎紅葉 | 西鶴文粋 |
| 博文館校訂 | 真書太閤記　4巻 |
| 〃 | 大岡政談 |
| 〃 | 通俗三国史　2巻 |
| 〃 | 膝栗毛 |
| 〃 | 八犬伝　4巻 |
| 〃 | 水滸伝　2巻 |
| 〃 | 四大奇書　2巻 |
| 〃 | 源平盛衰記 |
| 〃 | 太平記 |
| 〃 | 仇討小説集2巻 |
| 〃 | 近松世話浄瑠璃 |
| 長谷川二葉亭 | 平　凡 |
| 〃 | 其面影 |
| 〃 | 乞食（ゴーリキー） |
| 〃 | 片恋（ツルゲーネフ） |
| 〃 | 浮草（ツルゲーネフ） |
| 〃 | カルコ集 |
| 〃 | 血笑集（アンドレーフ） |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 森田　思軒 | 思軒全集　第1巻 |
| 〃 | 懐旧（ユーゴー） |
| 〃 | 十五少年 |
| 森　　鴎外 | 続一幕物 |
| 〃 | 一幕物 |
| 〃 | 黄金の杯 |
| 〃 | 水沫集 |
| 〃 | かけ草 |
| 〃 | 即興詩人（アンデルセン） |
| 〃 | ゲルハルト・ハウプトマン |
| 内田　魯庵 | 社会百面相 |
| 〃 | 復活（トルストイ） |
| 〃 | イカモノ |
| 上田　　敏 | 心（アンドレーフ） |
| 相馬　御風 | ゴーリキー短篇集 |
| 〃 | 父と子（ツルゲーネフ） |
| 〃 | 其の前夜（同上） |
| 高安　月郊 | イプセン作社会劇 |
| 千葉　掬香 | ヘダ・カブラー（イプセン） |
| 〃 | 蘇生の日（イプセン） |
| 〃 | 建築師（イプセン） |
| 柳川春葉・佐藤紅緑 | イプセン全集 |
| 藤澤　古雪 | 新婦人（ヅーデルマン） |
| 土肥　春曙 | 社会劇 |
| 海老澤　亮 | 三家庭（フアラー） |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 飯田　旗軒 | 巴里（ゾラ）2巻 |
| 〃 | ゾラ短篇集 |
| 戸田　秋骨 | 猟人日記（ツルゲーネフ） |
| 〃 | 西詞余情（ゾラ外） |
| 〃 | ガリバー旅行記（スヰフト） |
| 長田　秋涛 | 祖　国 |
| 〃 | 椿姫（ジューマ） |
| 木村鷹次郎 | 海賊（バイロン） |
| 〃 | 天魔の怨（バイロン） |
| 松本　信夫 | ツワイストールド・テールス（ホーソン） |
| 本田増次郎 | 黒馬物語 |
| 雪　蕾　生 | かくれ蓑　2巻 |
| 五来　素川 | 未だ見ぬ親 |
| 〃 | ひとりぼつち |
| 浅野　憑虚 | スケツチブツク　2巻 |
| 戸澤　姑射 | ハムレツト |
| 〃 | ロメオエンドジュリエツト |
| 浅野　憑虚 | ベニスの商人 |
| 戸澤　姑射 | シーザー |
| 〃 | リア王 |
| 浅野　憑虚 | から騒ぎ |
| 〃 | 行違物語 |
| 〃 | 御意のまゝ |
| 〃 | アダムの日記（トウエン） |
| 小杉　武次 | 沙翁物語集（ラム） |

| 著訳者 | 書　名 |
|---|---|
| 松本　雲舟 | 何処に行く（シェンキエヰツチ） |
| 漱沼　夏葉 | チェホフ傑作集 |
| 百島　　操 | トルストイ小説集 |
| 〃 | トルストイ短篇集 |
| 柴田　流星 | アンナ・カレンナ（トルストイ） |
| 徳田　秋江 | 生立ちの記（トルストイ） |
| 筑山　正夫 | 長恨（トルストイ） |
| 落合　浪雄 | やみのちから（トルストイ） |
| 馬場　孤蝶 | 泰西名著集（ツルゲーネフ） |
| 昇　　曙夢 | 白夜集（同外） |
| 吉江　孤雁 | ツルゲーネフ短篇集 |
| 堺　　枯川 | 家庭夜話（ゾラ外） |
| 草野　柴二 | モリエエル全集（上下） |
| 原　　弘毅 | 独逸戯曲物語 |
| 佐藤　芝峯 | うゐるへるむてる |
| 久保　天随 | エルテル（ゲーテ） |
| 〃 | 酔人の妻（ペスタロツチ） |
| 秋元　芦風 | 鷲鳶曲（ゲーテ） |
| 皆川　正陰 | ワグネル物語 |
| 若松　賤子 | 忘れかたみ |
| 〃 | 小公子 |
| 佐々木　邦 | いたづら小僧日記 |
| 〃 | おてんば娘日記 |
| 〃 | ドン・キホーテ物語 |